1956 年ハンガリー動乱を読み解く

盛田　常夫

ここに収められた論考は、2006 年から 2008 年にかけて、「月刊ハンガリー・ジャーナル」誌に連載されたものである。今回の編集において、当時の論考をそのまま掲載しており、内容の変更を加えていない。そのため、時間的に前後する記述になっている箇所がある。ご了解願いたい。

2016 年 11 月編集

目　　次

第１部　カーダール政権誕生の秘密
カーダール政権の原罪　1
ソ連共産党とカーダール政権　4
ハンガリー動乱参加者の運命　7

第２部　ナジ・イムレの処遇をめぐる謎
ナジ・イムレの運命　9
ナジ・グループ亡命の謎を解く　13

第３部　動乱を招いた暗黒時代
権力犯罪とどう向き合うか　17
ノエル・H・フィールド拉致事件　20
ライク・ラースロー処刑事件　24
ライク事件からスランスキー事件へ　28
社会民主党出身者の粛正　30
AVH（国家保安庁）粛正の始まり　32
国家保安長官ピーテル・ガーボル逮捕　34

第４部　ハンガリー動乱 50 年、ナジイ・イムレ処刑 50 年
カーダール時代評価の難しさ　38
ナジ・イムレ処刑 50 年　43
動乱と経済学者　46

第１部

カーダール政権誕生の秘密

カーダール政権の原罪

1988年5月、ハンガリー社会主義労働者党書記長カーダール・ヤーノシュは自ら議長に退く決断を下し、動乱から32年弱の長期にわたって続いたカーダール時代が終焉した。議長職が解かれたのは翌年5月。その2ヶ月後、ナジ・イムレ復権の裁判決定が出た日に、この世を去った。

ソ連の戦車に守られてブダペストに戻り、権力に就いたカーダールの評判が良いはずはなかった。後ろ盾のソ連共産党も、カーダールを一時的なカードと考えていた。しかし、国際情勢の目まぐるしい変転の中、政治支配の極意を体得したカーダールはソ連共産党の信頼を得ただけでなく、国内でも国民融和政策を展開して、次第に国民的支持を獲得することに成功した。ソ連型モデルから距離を取るカーダールの姿勢と政策は、経済改革を推進するハンガリー型社会主義というイメージを作り出した。

「カーダールは経済改革の熱心な推進者であったことはなかったが、推進するにせよ抑制するにせよ、その決断を主導した」というのが、改革全体を取り仕切ったニェルシュ・レジューの評価である。改革の発進を決断したのも、またソ連の批判を受けて改革にブレーキをかけたのも、カーダールである。常にソ連共産党の出方を伺いながら、時には改革を、時には抑制へと舵取りするカーダールに、彼の統治手法の極意が隠されている。

亡霊に悩まされた最後

これまで、カーダールの引退後の最後について語られることがなかったが、権力の出生を知る上で重要な興味深いエピソードがある。

1980年代に入って健康状態が悪化したカーダールは、長期の休暇を取ることが多くなった。1988年に書記長職を離れてから、さらに老化現象が進み、加えてカーダールの生涯にかんする長時間のインタビューが予定される段になって、過去の事件が想起され、記憶の混濁と自らが手を汚した二人の亡霊に悩まされたと言われている。言うまでもなく、その亡霊とはライク・ラースローとナジ・イムレである。ともにハンガリーの社会主義成立史に残る二つの世界史的事件の主人公である。

書記長辞任の決断直前まで、カーダールは近しい友人たちに国内の反体制勢力の情勢を打診し、進退の是非を含めた助言を求めていた。反体制の思想が息を吹き返し、反共産党の非合法政治組織が活発化したことに神経を尖らせ、それが「第二の56年事件」になると考えていたようだ。権力者としての直感が、進退の判断を求めた。

書記長職を離れ、病気療養していたカーダールは、突然、翌年1989年4月の社会主義労働者党中央委員会に出席し、取り留めのない長い発言を行った。病院から党本部へ出発したカーダールを制止すべく、主治医は党本部のグロース書記長に電話し、出席させてはならないと忠告したが、グロースはカーダールを制することなく発言させた。中央委員には初めて聞かされた事実もあったようだが、すでに正常な思考を維持できないカーダールの老醜を目の当たりにすることになった中央委員は、改めてカーダール時代が過去のものになったことを悟った。

解任決議直後のカーダール

翌5月の中央委員会において、カーダールの議長職解任と年金生活への引退が決定された。グロースがカーダールの中央委員会出席を制止しなかったのは、この決定を納得させるための意図があってのことだとも言われている。党本部のカーダールの予定表には、中央委員会開催日の夕刻に、ニェルシュ・レジューとの会談予定が記載されていたというから、少なくともグロースはカーダールの来訪を予想していたはずだ

からだ。ニェルシュによれば、短時間の話し合いの中で、カーダールは「ナジ・イムレが首相辞任の署名をしなかったことが処刑の結末を導いた」ことを繰り返し語ったという。

カーダールには議長職解任決定を理解する能力が残っており、この決定を伝える使者がカーダール邸に到着した時には、すでに引越しの準備を完了していたという。権力を下りることはすべてを失うことだと考えていたのだ。

労働者出身で、権力者になっても清貧に甘んじていたカーダールを高く評価する人は多い。周辺国の権力者が蓄財や肉親の重用、奢侈に溺れていたのとは対照的に、カーダールは粗末な邸宅に、活動家の妻とともに質素な生活を送っていたことで知られている。その邸宅すら明け渡す準備を終え、庭で引越しの迎えを待っていたという。もちろん、誰も引越し指示をしていなければ、引っ越し先がある訳でもなかった。しかし、カーダールは最後の力を振り絞って、解任決定の意味を理解しようとしたのである。

ライク事件におけるカーダールの役割

1949年、現役の外務大臣ライク・ラースローがアメリカのスパイ容疑で逮捕され、処刑された事件は戦後の社会主義成立史の暗黒時代を象徴する事件として知られている。1956年動乱がライクの復権と埋葬式を契機に勃発したことを考えれば、この事件の持つ意味は重い。

ライクが逮捕された1949年、カーダールは内務大臣の職にあった。40歳に満たないカーダールとライクが政府の要職に就けたのには、幾つかの理由がある。

ひとつは、ハンガリー国内で戦前から活動家として生き延びた共産党員、とりわけ有能な指導的党員が少なかったこと。

二つは、戦後のハンガリー共産党の再建は、ソ連帰りの共産党員で、ソ連共産党の指示を受けた人物が主導したこと。

三つは、ソ連帰りの共産党指導者には、国内の状況を良く知る党員を重用することで、組織再建を速やかに実行する必要があった。

ハンガリー共産党の戦後再建を主導したのは、ラーコシ・マーチャーシュ、ゲルー・エルヌー、ファルカシュ・ミハーイ、レーヴァイ・ヨージェフである。皆、戦前からの党指導者で総本山のソ連帰りという箔をつけていた。トロイカとも、四人組とも呼ばれた最高指導グループを形成した。その彼らが、国内党員で知識人出身のライクと労働者出身のカーダールを重用することで、国内党員の組織化を図った。

ライク事件は、冷戦が始まり、国内の引き締めを図るために、スターリンが「アメリカのスパイ摘発」と称して、ソ連党幹部の逮捕・処刑を始めたことに触発されたものだ。当時、ラーコシはスターリンの庇護を受けたいばかりに、スターリンとベリアのシナリオに従う「スパイ摘発」キャンペーンを実行した。この謀略はトロイカあるいは四人組で立案されたと考えられている。国内組の党員から犠牲者が選ばれ、労働者出身のカーダールではなく、知識人出身のライクが標的になった。党の結束力を考慮して、労働者出身カーダールは犠牲対象から外された。

戦前の共産主義運動時代からカーダールとライクは知己の仲であり、カーダールにはライク事件が捏造されたものであることは分かっていた。にもかかわらず、内務大臣としてこの事件を指揮する立場に追い込まれた。カーダールが政治家として初めて手を汚した事件だった。捏造事件の首謀者ではなかったが、醜い汚れた仕事に加担しなければならなかった苦悩と悔悟の情は、死ぬまでカーダールの脳裏から離れることはなかった。

翌1950年、カーダールは自らの意思で、内務大臣を辞し、その1年後の1951年に、ラーコシ一派の策略に嵌って逮捕され、終身刑の判決を受けた。同じくラーコシ一派の犠牲になったことから、ライク事件の係わりを免罪できると考えていた節がある。実際、1960年代初期にラーコシ時代の清算決定を行う際に、ライク事件における自らの役割には一切触れない報告が準備され、実際の清算人事においても、過去の罪で裁くのではなく、その後の行動によって評価すべ

きという立場を主張したのは、自らの負い目を正当化する意図があったと考えられる。しかし、意識の奥底から、手を汚した記憶が消えることなかった。

ナジ処刑におけるカーダールの役割

ライク事件はラーコシ一派の策略に乗せられたものだったが、ナジ・イムレの処刑はカーダール自らが主導したものだった。その意味で二つの事件はまったく性格が異なる。

ただ、カーダールの名誉のために付言しておけば、ナジ・イムレ他の政府メンバーを虚言でユーゴスラビア大使館からおびき出し、ルーマニアに送還し、かつ再びハンガリーに戻して裁判にかけるシナリオは、すべてソ連共産党が仕組んだものである。この一連のシナリオにおいて、ナジの運命は既定のものだったと言える。

しかし、カーダールも主張しているように、早い段階でナジが首相辞任を表明していれば、処刑にまで至らなかった可能性が大きい。他方ナジ逮捕から時間が経過する中、ソ連共産党内部のクーデター騒ぎやフルシチョフの平和攻勢路線で、フルシチョフ周辺では「絞首刑宣告の後に特赦」という方法が何度も検討された。

この辺りの詳しい事情は次号に記すが、最終的に、ナジの取り扱いはハンガリー共産党（社会主義労働者党）に一任された。

動乱から時が経つに連れ、カーダールは自らの権力基盤が安定しないことに苛立っていたと言われている。なぜなら、一方ではソ連に亡命中のラーコシ他の指導者が、政権返り咲きの機会を狙っていた。他方ではナジが赦免されれば、ナジが政敵となる時が来るかもしれないという不安に襲われていたからだ。56年問題を早く決着させたいカーダールには、ナジ特赦という選択肢は残されていなかった。ナジ以外の小物の「扇動者」が処刑され、ナジだけが特赦されるのは理に合わないと考える党員も多かったと言われる。カーダールはナジの処刑によって、政権の正当性が問われる政府の臨時性を清算する道を選んだ。

カーダールの原罪

ナジ処刑にたいするカーダールの係わりが以上のことで済むものなら、カーダールがナジの亡霊に悩まされることもない。政権安定のために、ソ連のシナリオに乗ったと釈明すれば良い。権力者であれば、その程度の権謀術数は許容範囲にある。

しかし、カーダールがナジの亡霊に悩まされたのには、十分な理由がある。ナジが有罪なら、カーダールにナジを裁く資格がないという明々白々の事実が存在するからである。このことは、カーダールが生涯かけて自ら口外せずに、頑として黙り通した事実である。死の最後の瞬間まで、動乱勃発から動乱収束に至る自らの役割は、あの世に背負っていくべきカーダール政権誕生の原罪だったのである。

1954年に監獄から解放されたカーダールは、1956年6月のラーコシの追放に伴い、ハンガリー勤労者党（共産党）の政治局員に選出され、指導部書記に任命された。長期のユーゴスラビア訪問から帰国したその日（10月23日）に動乱が勃発した。即座にこれを「反革命的」と断定し、デモ禁止令を発した。しかし、その後の事態の急展開を反映して、勤労者党指導部内部の見解が分かれ、カーダールの情勢判断も揺れた。10月28日には勤労者党の見解が180度変わり、動乱の革命性を容認し、党の「6人委員会」議長に選ばれた。10月30日には党幹部会の見解をまとめる議長役を務め、複数政党制の容認と連立政権樹立を決定し、ナジ・イムレを首班とする臨時政府の国務大臣として、7名構成の政府閣僚の一員となった。そして、10月31日には勤労者党を解党し、再生共産党である社会主義労働者党を設立し、その執行委員会議長となった。そして、11月1日、政府の最高メンバーの1人として、ナジ・イムレとともに、ワルシャワ条約機構からの脱退と中立国への移行を決定し、夕刻放送予定のラジオ収録でこれを宣言したのである。しかし、カーダールはこの夜の放送を聞くことなく、ソ連の軍用機でモスクワに向かっていた。

ソ連共産党とカーダール政権

1956年11月1日、カーダールはブダペストから忽然と姿を消した。彼が再びブダペストに現れるのは、3日後の11月4日である。未明にモスクワからソルノークに到着し、そこからソ連の戦車に乗って、ブダペストに入った。

いったい彼に何が起こったのだろうか。この数日間のカーダールの行動は、長期にわたって秘匿され、カーダール自身もけっして口外することはなかったが、ソ連共産党政治局資料が公開され、全容が明らかになっている。

カーダールは自ら進んでモスクワに向かったのではなく、事実上、ソ連に拉致されて、モスクワに連行されたのだった。11月1日、当時の在ハンガリーソ連大使アンドロポフは、カーダールとミュニッヒ・フェレンツを大使公邸に招いた。そこでどういう会話が交わされたのか分からないが、この招聘は最初からこの2人をモスクワに連行するためのものだった。その日のうちに、マーチャーシュフリュドのソ連軍基地からウクライナ領を経由して、モスクワに連行され、翌2日にソ連共産党政治局の会議に、この2人が立たされることになった。

先を急ぐ前に、ソ連共産党と中東欧諸国の共産党との当時の関係を知っておく必要がある。

ソ連共産党の影響力

第二次大戦後、ソ連が占領駐留した中東欧諸国では、ソ連共産党の強力な支援によって、次々に社会主義政権を樹立し、複数政党制を廃止し共産党の一党支配を生み出した。社会主義の総本山ソ連の最高指導部は、共産党政治局である。中東欧諸国の国家運営にかかわるすべての重要決定は、ソ連共産党政治局の討議を通じて、各国の共産党指導部に伝達された。

ソ連共産党と中東欧諸国の共産党を繋ぐパイプ役を果たしたが、ソ連帰りのエリート党員だった。ハンガリーではラーコシ・マーチャーシュが、ソ連共産党の意思を体現するカリスマであった。

社会主義者と社会主義国にとって、ソ連共産党の権威は絶対である。これに逆らうことなど、共産党員にとって考えられないことだった。したがって、ソ連共産党の威光を背にするラーコシの権威もまた、ハンガリー共産党（勤労者党）では絶対的で、そのラーコシがスターリンの歓心と庇護を狙って仕組んだ姦計が、ライク事件である。

動乱の混乱の真っ只中、事前の準備もなく、突然に世界共産主義運動の総本山クレムリンに連行されたカーダールの心中は穏やかなはずがない。どのように振る舞うべきか。どのように主張すべきか。事前の準備のないカーダールの主張が揺れ動き、矛盾に満ちたものだったとしても、誰も責められないだろう。フルシチョフはカーダールの事情をよく理解し、クレムリンの保守派はカーダールを嫌っていた。

ソ連共産党政治局の内情

1956年は、ソ連共産党史においても歴史を画期する年である。2月に開かれたソ連共産党第20回党大会において、フルシチョフ書記長は長時間にわたる「秘密報告」を行った。これがいわゆる「スターリン批判報告」である。ほどなくこの「秘密報告」は西側の通信社を通して、全世界に配信され、大きな衝撃を与えることになった。この「秘密報告」が契機となり、中東欧諸国の共産党内部に大きな変動が生じた。

ハンガリーではスターリンの「忠実な優等生」を自認するラーコシの罪状が暴露され、ラーコシ一派の追放が行われた。それによって共産党内部の勢力関係は逆転し、ナジ・グループの勢力復活とカーダールの党指導部への復帰が決定された。共産党における変化を感じ取った反体制派が、ライク埋葬式から街頭行動に移っ

たのが56年動乱である。明らかに、ソ連共産党における「スターリン批判」という契機を抜きに、56年動乱を語ることはできない。

しかし、総本山ソ連共産党政治局は、反スターリンの一枚岩でまとまっていた訳ではなかった。フルシチョフ書記長のスターリン批判を「行き過ぎ」と考える保守派が、政治局の多数派を形成していた。それがあらゆる事態を複雑なものにした。

カーダール擁立をめぐる抗争

ラーコシ派に不信を抱くフルシチョフは、カーダールを軸に臨時政府を樹立する方向を固めていたと思われる。しかし、事は簡単に進まなかった。フサール・ティボールの近著（Kadar-A hatalomevei 1956-1989, Corvina, 2006）によれば、カーダールがクレムリンの場に呼び出された11月2日、フルシチョフはマレンコフとともにユーゴスラビアに滞在しており、最初の聴聞はブルガーニンが議長役となり、「ハンガリーの事情に詳しいミコヤンとスースロフ」、「（フルシチョフ）第一書記と対立関係にあるカガノヴィッチ、モロトフ、ノヴォシロフ」が参加したとある。

この時、別のルートを経由して、ゲルー・エルヌーとヘゲドゥシュ・アンダラーシュ（元首相）、ピロシュ・ラースロー内務大臣、バタ・イシュトヴァーン防衛大臣がモスクワに到着し、彼らにナジ政府に代わる政策プログラムの立案が任された。他方、ソ連に亡命していたラーコシはソ連共産党政治局に請願書を提出し、カーダールはナジ一派であり、指導者として相応しくないと主張し、自らの復権を訴えていた。

この聴聞会ではハンガリー情勢の検討が行われたが、カーダールがナジ政府の一員のごとく振る舞ったことに保守派が苛立ち、ここからモロトフはカーダールではなく、ミュニッヒを擁立すべきだと強力に主張するようになった。

翌3日の午後にモスクワに戻ったフルシチョフはすぐに会議に加わり、ミュニッヒを推すモロトフの意見を聞いたが、それに納得せずに2人から一緒に意見を聞こうということになった。

当時のソ連共産党政治局ではフルシチョフ反対派のモロトフ一派はカーダールを嫌い、ミュニッヒのようにソ連での亡命生活経験がある党員に親近感を抱いていた。それに抗して、フルシチョフがカーダールに拘った理由は何だったのだろうか。

ひとつは、フルシチョフの優れた政治感覚である。旧ラーコシ一派は人間的に信頼できないと考えており、彼らでは政権がもたないと判断したのだ。二つは、臨時政府を作るにせよ、ある程度の政府の継続性がないと、国民を説得できないだろうという判断である。継続性を示す上で、ナジ政府の一員だったカーダールは適材だったのである。

この二つの判断は正しかった。現実的政治家フルシチョフの面目躍如たるものがある。

しかし、カーダールには動乱における役割とは矛盾する役割と機能を負わされることになり、生涯にわたってこの矛盾を妥協的に政治処理する道を余儀なくされたと言えよう。

フルシチョフの判断は揺るがなかった。彼はカーダールを説得し、「社会主義権力の存続のために必要だ」と諭され、延々と続いた11月3日の会議の終わりに、カーダールが政府首班の役割を受諾することになった。

政治局ではカーダールを評価しない政治局員が多数を占めたが、カーダール以外に当面の顔が存在しないことも事実であり、ソ連政治局の多数を占める保守派は、あくまでカーダールをリリーフ役として登板させることに同意したと考えられる。

カーダールに対するフルシチョフの信頼は、これ以後、カーダールの唯一の拠り所となった。カーダールは政府首班を受諾する弁論で、「56年動乱のもっとも深い原因は、ソ連共産党が12年間にわたってラーコシとゲルーに支配の特権を与えたことにある」とこれまでのソ連共産党の行動を批判した。その思いは生涯変わらなかった。

ハンガリー占領体制

ソ連の戦車によって鎮圧された56年動乱は、ハンガリーにソ連の軍事的占領支配体制を樹立することになった。占領体制は３つのレベルから形成されていた。

ひとつは、司令本部である。ブダペスト郊外のレアーニィファルにある社会主義労働者党の幹部用保養施設に、ソ連共産党の最高司令部が設置された。マレンコフ政治局員が最高司令官となり、中央委員会書記のスースロフとアリストフが側近として配置され、ソ連共産党の意向はすべてこの占司令本部からカーダールに伝えられた。ユーゴスラビア大使館に立てこもったナジ・グループを誘い出し、ルーマニアに送還する行動方針も、ここから発せられた。

第二は、軍事的な占領体制である。ソ連のコニェフ大将率いる師団が、ハンガリーをいくつかの直轄地域に分けて、占領統治した。

第三は、ソ連軍の地区軍事司令官が区域の政治・経済管理を行えるように、40-50名の専門家集団が送り込まれた。このいわば諜報活動を指揮したのは、セロフKGB長官である。セロフはハンガリー内務省国家保安局（ÁVH）の要員を再編成して、諜報活動を行った。

カーダールはセロフから、軽微な罪状の市民を早急に釈放するという約束をとったが、これは空手形だった。ラーコシ政権下で多数の政治家や市民を拘束し、拷問を加えた保安局の要員が、今度はKGBの指揮のもと、動乱に参加した人々の摘発の仕事を引き受けることになったのだ。ソ連軍は動乱参加者やソ連軍に反抗した者をシベリアにも送ったようだが、その詳細は明らかでない。

こうして、無政府状態になったハンガリーにカーダールを首班とする名前だけの臨時政府が樹立されたが、事実上はソ連による軍事占領体制が築かれたのだった。ソ連共産党とソ連軍・KGBに囲まれ、ほとんど孤立無援の状態で、カーダール政権が発足した。まさに傀儡政権そのものであった。

ソ連の軍事占領状態から抜け出し、カーダールが自らの権力基盤を築くためには、まだ長い時間が必要だった。

ソ連共産党政治局クーデター

カーダールの最大の課題は、動乱によって解体された党と国家体制の再編成である。動乱の事後処理はいわば裏と表の二つの方向から行われた。

裏の仕事は、動乱に積極的に参加した者の拘束と処分である。これは事実上、KGBに指揮された国家保安局が、カーダールの意向とは独立して実行された。表の仕事はカーダールに課せられたもので、党と国家機構の再編成である。

そして、このちょうど境に位置するのが、ナジ・グループの処分である。ナジ・グループは1957年4月17日にハンガリーへ移送され、すぐに逮捕・拘束された。この移送もソ連が決めたことであるが、カーダールの役割はナジ・グループを訴追し、適切な処分を下すことだった。カーダールにとって、ナジへの判決と処分は、動乱を収束させるための最後の仕事だった。しかし、ナジ・イムレ他の処刑が行われる翌年6月まで、内外の情勢に翻弄される日々が続いた。

1957年6月17日、モロトフとマレンコフはソ連共産党政治局会議で、行き過ぎたスターリン批判を理由に、フルシチョフ解任決議を提案した。政治局員の多数がこれに賛成する中、ミコヤン、スースロフ、キリチェンコが反対し、議決権をもたないブレジネフとジュコフも反対に回った。KGBをバックにもつジュコフが立ち回り、逆に中央委員会でマレンコフ、モロトフ、カガノヴィッチを失脚させ、他の政治局員を格下げすることで、フルシチョフ解任の試みが失敗に終わった。

マレンコフの占領本部は56年12月に引き揚げ、ソ連の監視が平時のKGB支配に移り、カーダールの政策決定自由度は広がっていたが、ソ連共産党政治局の保守派の退却は、さらにカーダール政権自立への転機となった。

ハンガリー動乱参加者の運命

動乱の犠牲者

10月23日から始まった動乱は11月4日の鎮圧でひとまず終息するが、地方ではソ連軍との散発的な衝突が続いた。10月から11月のソ連軍との衝突によるハンガリー人犠牲者（死亡者）は、2500～3000名と推計されている。

1957年1月17日付けの*Népszabadság* 紙に、中央統計局の犠牲者推計が掲載された。それによれば、ブダペスト市街の戦闘で死亡した市民は1969名、各種医療施設に運ばれた負傷者は17000名に上る。また、地方の犠牲者は300名に及ぶ。さらに、ハンガリーの軍・警察の犠牲者は423名に上り、このうち内務省管轄組織の犠牲者が155名で、そのほとんどが保安局に属する者である。

他方、ソ連軍の被害も大きく、669名の死亡、51名の行方不明、1986名の負傷者で、ソ連軍の死亡者のほとんどはブダペスト第8区および第9区における市街戦での犠牲者である。

無政府状態の混乱の中で、事実上、オーストリア国境が開放され、動乱勃発時から数ヶ月の間に国外へ亡命した人々は20万人と推定されている。もちろん、その中には反体制側に立った人々に加え、体制側にいた人々やこの機会を利用して国外へ逃げた若者が多く含まれていた。

さらに、蜂起鎮圧後、動乱参加者の逮捕・起訴が相次ぎ、1959年末までに200余名の動乱参加者が死刑判決を受け、即刻処刑された。その中には、ナジ・グループも含まれる。懲役刑を受けた人々も数がどれほどになるか見当もつかないが、ひとつの参考数字がある。

1957年12月21日に開催された社会主義労働者党（共産党）の中央委員会で、内務省に登録されている反革命分子リストには120万人が記載されていることが報告された。その数字に驚いたカーダールは最大で20万人まで削減することを指示し、さらに悪質な反体制家6000名程度を別枠で登録するように指示した。

実際問題として、この数も多すぎる。内務省にそれだけの処理能力があるはずがなかった。

ナジ・グループの処罰

ナジ・グループとして一括起訴されたのは9名である。ナジ・イムレ、ロションツィ・ゲーザ、スィラージ・ヨージェフ、マリーテル・パール、ドナート・フェレンツ、コパーチ・シャンドール、ヤーノシ・フェレンツ、ヴァーシャールヘイ・ミクローシュ、ギメシュ・ミクローシュ、ティルディ・ゾルターンである。このうち、一切の尋問協力を拒み、カーダールを弾劾し続けたスィラージ・ヨージェフについては、ソ連共産党の裁判停止要請以後も分離裁判が続けられ、1958年4月22日に死刑判決が下され、2日後に処刑された。当該裁判を指揮した裁判長は戦前の非合法時代からのスィラージの同僚、ヴィダ・フェレンツだった。

この事例から分かるように、カーダールはナジ・グループの内部の選別を明確にし、蜂起の責任が重いと判断したナジ、マリーテル、ギメシュに死刑を、その他の者には懲役刑を科した（ロションツィは獄死）。

さらに、ナジ政府の一員としてユーゴスラビア大使館に亡命し、後にルーマニアに移送された者のうち、1919年樹立の社会主義政府閣僚を務め、1956年のナジ政府でも人民文化大臣に任命された哲学者のルカーチ・ジョルジュと、経済閣僚を歴任したヴァシュ・ゾルターンについては、ブダペスト移送後に、政治活動に加わらない誓約書をとって釈放した。

明らかに、政治的にカーダールに真正面から敵対する者には死刑を、それ以外の者は政治を離れる条件で減刑・保釈したのである。保釈された人々は以後、ハンガリー社会の表舞台で活躍する道は閉ざされ、厳しい監視のもとで蟄居生活を続けざるを得なかった。

「革命」vs.「反革命」

本コラムでは「56年革命」という表現をとらず、「56年動乱」という表現をとっている。ある歴史事件を「革命」と見るか「反革命」見るかは、政治的な判断を要する。政治体制が変われば、歴史の見方も変わる事例は無数に存在する。ハンガリーにおいても、1988年末まで、「56年動乱」の公式見解は「反革命」であった。

今、ハンガリーでは誰もが「56年革命」を語るが、部外者である筆者はハンガリー国内の歴史判断の変化に影響されるのを避けたい。このような理由で、本コラムでは「革命」とも「反革命」とも規定していないが、「人民蜂起」事件であったという認識の上で、「56年動乱」という表現を使っている。

もうひとつ、歴史的事件に一方的な政治判断を下すと、事件の全容を見失うことがある。確かに、「56年動乱」は大局的には既存の体制にたいする不満が勃発した蜂起だと言えるが、蜂起側には多様な人々が参加していた。蜂起に立った多くは自然発生的な怒りに燃えた人々だが、暴力的な挑発を行うグループや無責任な武装グループがいたことも否定できない。それが無用な衝突や殺人をひき起こしたケースもある。他方、体制側にはソ連軍、ハンガリー軍、警察、保安局に加え、党組織の人々がいる。街頭での戦闘以外に、蜂起側の武力襲撃で命を失った人々の多くは、党本部や警察・保安局で執務していた人々である。これらの犠牲者も同じくハンガリー人であり、彼らにも家族がいる。「革命」ではいろいろな人々の血が流されている。

ひとつの体制のすべてが悪で、別の体制のすべて善だということはない。単純に革命あるいは反革命という規定を行うことより、そのような歴史事件をもたらし種々の原因や状況を明らかにし、さらにその歴史事件以後の社会の変化を辿ることで、ひとつの歴史事件の全体的評価が可能になる。だから、事件の出来事を詳細に扱うことより、歴史の流れの中で評価する姿勢をもちたい。後世を生きる者にとって、この姿勢をもつことが大切だ。

国内宥和政策

ナジ処刑によって、カーダールの動乱処理が一段落した。しかし、なお1958年末まで、動乱参加者の裁判、そして処刑が続いた。その変化が現れるのは1959年からである。この辺りから動乱参加者の追求や告訴は逃亡している指名手配者に絞られ、政治的に対抗しない者への捜査が止んだ。

実刑判決を受けた動乱参加者の大量釈放は、1963年4月22日付けの宥和特赦令にもとづく。この特赦令によって4千名を超える拘束者が釈放されたが、実際には1959年から散発的に受刑者の釈放が行われてきた。ナジ・グループで実刑判決を受けた者のうち、懲役6年のティルディは1959年に、懲役8年のヤーノシと懲役12年のドナートは1960年に、懲役5年のヴァーシャールヘイは1961年に、そして終身刑となったコパーチは1963年に釈放された。

この事例から分かるように、カーダールはナジ処刑以後、国民宥和に向けて方向転換したことが分かる。それを後押ししたのは、国内の経済状況と国際情勢の変化である。

動乱によってハンガリー経済はさらに疲弊し、ソ連からのエネルギー供給の増加と国内の生産引上げが緊急課題になっていた。しかし、政治的な締付け政策を展開していたのでは、国民の活力を引き出すことができない。したがって、動乱参加者の追求に歯止めをかけ、国民の政治感情を好転させ、労働意欲を高めて、国民経済向上へ舵取りする必要があった。

他方、国際的にはフルシチョフの平和攻勢によって、米ソ宥和の政策が展開されていた。ナジ処刑によって不興を買ったソ連とハンガリーは、社会主義圏にたいする敵対的状況を緩和すべく、大胆な国民宥和政策を打ち出して、友好的な姿勢を示す必要性に迫られていた。

ソ連にとってもハンガリーにとっても、国内経済の立て直しと生産性の向上は至上命令であり、東西融和による経済的メリットを享受するという戦略があったのである。

第 2 部

ナジ・イムレの処遇をめぐる謎

ナジ・イムレの運命

ユーゴスラヴィア大使館に逃げ込んだナジ首相グループをどう取り扱うのか。これがブダペストに戻ったカーダールが最初に取り組んだ問題だった。

カーダールは当初、ナジ・イムレが首相辞任を表明して政府消滅を認めれば、国外亡命を容認し、他方でグループから新政府に協力する人々を受け入れることを考えていた。ユーゴスラヴィア政府もこの線での解決を望んでいたと思われる。事実、ティトーの仲介によって、これを実現しようとしていた。

しかし、ソ連共産党政治局は早々と11月10日に、ナジ・グループの命運を決する決定を行った。しかし、そのシナリオは実行直前までカーダールに知らされず、もちろんユーゴスラヴィア共産主義者同盟にも知らされなかった。

ナジ・グループ処遇をめぐる状況

ナジ・グループが英雄広場の角にあるユーゴスラヴィア大使館に逃げ込んだ理由は明白である。当時、ユーゴスラヴィア共産主義者同盟はスターリン型の集権的ソ連社会主義を批判し、自主管理型社会主義を目指して、ソ連共産党とは一線を画していたからだ。いかに対立関係にある共産党といえども、ソ連は簡単に手を出せないだろうという判断があった。

しかし、ユーゴスラヴィアにとって、急に飛び込まれた客人の扱いは難しいものだった。ユーゴスラヴィア側は、ナジ・グループが自己批判に署名し、安全に亡命あるいは帰還する道を探っていた。しかし、この方法はナジ・グループの拒否にあって膠着状態に陥った。カーダールとユーゴスラヴィア大使との間で、帰還させる条件や身の安全確保の保証について、議論が続いていた。

ソ連共産党がナジ・グループ処理のシナリオをカーダールに伝えたのは11月16日である。カーダールがレアーニィファルの「占領本部」に出向いた時に、マレンコフからソ連共産党の方針が伝えられた。カーダールはこの方針を受け、ソ連の奸計を知りながら、ユーゴスラヴィア大使に虚偽の約束を行い、ナジ・グループを大使館からおびき出す役割を与えられたのである。

11月22日午後、ソ連軍兵士が運転するバスがユーゴスラヴィア大使館に横付けされた。当初の約束に反し、ナジ・グループはKGB本部が設置された軍事学校へ連行され、そこからルーマニアへ移送された。このニュースは瞬く間にブダペストの街に広がり、カーダールの評判をさらに落とすことになった。

かくして、ナジ・グループはソ連の捕虜となったのである。当初からこのシナリオにカーダールが介入する余地は残されていなかった。カーダールはソ連の使い走りにすぎなかった。

ソ連共産党の意図

ソ連共産党の意図は最初からはっきりしていた。ハンガリーにおける「反革命」はいかなる手段をとっても徹底的に弾圧すべきもので、そこに妥協の余地はない。安易な妥協を許せば、欧州における戦後社会主義体制の環が崩れると考えていたことは間違いない。

ナジ・グループの処理が終わり、マレンコフは12月にソ連に戻ったが、ソ連共産党はハンガリーへの監視を強めるために、国際的な共同戦線を強めた。フルシチョフは1月初めに、ハンガリー情勢討議のために、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニア、チェコスロバキアとの5ヵ国共産党会議を開催し、さらに周恩来とフルシチョフのモスクワ会談にカーダールを呼んだだけでなく、その後に中国共産党代表団がハンガリーを訪問し、「反革命」にたいする国際的連帯を謳った。こうして、ハンガリーを包囲する国際的な戦線が敷かれた。

カーダールがナジ・グループとの協力関係を築くことは「反革命」の火種を抱えることになる。だから、この繋がりを徹底して断つことが、ソ連共産党および国際共産主義運動の共通の利益になるという理解であった。

革命と反革命：カーダールの理解

いかにソ連共産党から傀儡の役割を期待されようとも、カーダールは自らの役割の正当性の立証に拘った。マレンコフがソ連に戻る直前の12月初め、レアーニィファルの占領本部に出向いたカーダールは党の指導部会議で報告する内容の概要を伝えた。それは動乱の革命・反革命の性格規定にかんするものだった。

カーダールは動乱の過程を三つの時期に区分することに拘った。

まず、11月23日から30日の期間。反革命分子が現状の不満を訴える労働者大衆の正当な要求を、自らの目的のために利用しようとした時期と規定した。

次に、10月31日から11月4日の期間。反革命が勢いづいた時期で、共産党組織、国家保安局、警察が襲撃され、多数が殺害された反革命の最盛期だと規定した。

そして、11月4日以後は、反革命を鎮圧する時期と規定した。

カーダールは一連の事態を三つの時期に区分することによって、自らの役割を正当化できると考えた。当初は革命的性格をもっていたが、次第に反革命の色彩が強まり、その反革命を鎮圧するために、自らの出番がきたと。これは彼の中道路線と一致するものだった。

カーダールは一貫して、56年動乱の原因はラーコシーゲルー一派による誤った指導にあると考えていた。したがって、これにたいする反乱は正当なものであったが、次第に修正主義的な傾向や反革命的性格が強まり、ソ連の介入を招いた。これがカーダールの理解である。したがって、ラーコシの左翼的偏向とナジの右翼的偏向の中間に自らが存在するという中道路線を標榜することに、自らのレーゾンデートルがあると考えていた。

しかし、マレンコフ等のソ連共産党幹部はこのカーダールの時期区分を一蹴した。ソ連共産党にとって、一連の事件の細かな性格規定はどうでも良いことだった。「初めから終わりまで反革命だ」という単純な図式で十分だった。カーダール個人の政治（倫理）責任もどうでも良いことだった。ソ連共産党にとって、一時的カードにすぎないカーダール個人の政治的倫理など議論するに値しなかった。反革命を徹底的に一掃することにカーダールを利用できれば、その使命は終わると考えていた。

しかし、以後、カーダールは自らが設定した二つの戦線での闘いを、時には反スターリニズムに、時には反修正主義に重点を移すことで、その時々の政治情勢を乗りきろうとする。それが次第にカーダール型の統治スタイルを創ったと考えると、その出発点はこの時期にある。

内憂外患のカーダール

カーダールがその権力基盤を築くのに、かなりの時間を要した。もともと徒党を組んで組織を掌握するというタイプの政治家でなく、動乱前も後もカーダール・グループなど存在しなかった。背後を支える政治勢力が存在しないことが、カーダールの権力基盤の形成を遅らせた。さまざまなグループや潮流が入り乱れている動乱直後の状況は混沌としていた。

国内ではナジ・グループに親近感を抱く活動家や知識人が多かった。再生共産党の執行委員の中でも、ナジ・グループとの提携を考えるものが多かった。他方、内務省管轄下の国家保安局は旧ラーコシ時代の諜報部員や指揮官が支配しており、KGBの後ろ盾を得て、独立した権力を構成していた。KGBの諜報部員が党や政府に送り込まれ、カーダール自身の動向が監視されていることを前提に行動する必要があった。

国外では国際共産主義運動の包囲網が敷かれ、ソ連共産党政治局はカーダールをいずれ使い捨てる人物だとみなしていた。とくに政治局内の

反フルシチョフ派は、ナジに代表される修正主義にたいしてカーダールが十分な闘争を行っておらず、逆にラーコシ一派へのソ連共産党の肩入れを56年動乱の原因と考えていることを批判していた。

こうした不安定な政治基盤を安定化させる契機になったのが、1957年3月のソ連共産党・政府との協議である。真偽は明らかではないが、この協議でカーダールが大芝居を打ったと言われている。

この会談の中で、ヴォロシロフやマレンコフは、フルシチョフに宛てられたラーコシの手紙を引用しながら、カーダールの誤りを指摘し、優柔不断を批判した。それにたいして、カーダールは、「ここに来ている者は誰も権力に未練はない。我々を信頼できないならば、ラーコシなり必要な人物なりに権力を与えてもらって結構」と啖呵を切ったのである。さらに、フルシチョフとの個人会談では、「ラーコシやゲルーをハンガリーへ戻せば、再び混乱が起きることは間違いない」と伝えた。

こうした議論を経て、フルシチョフはカーダールに再び信任を与え、かつラーコシ一派のハンガリー帰還を認めない決定を下した。保守派によるカーダール批判が止んだわけではなかったが、カーダールは任期延長と政敵のハンガリー帰還阻止を獲得した。ここでも、カーダールはフルシチョフの支持と信頼を得、フルシチョフとカーダールの信頼関係が強まった。

ソ連共産党の信任を受け、かつラーコシ一派の復活を阻止したカーダールは、国内の権力基盤の安定化に力を集中することになる。ナジ・グループの処理は、そうした権力安定化の一プロセスに位置するものだった。ナジ・グループをハンガリーにおいて処罰するという方針は、この一連の会談の中で合意された。

ナジ・グループのハンガリー移送

こうしてナジの命運はカーダールの手に任された。1957年4月にルーマニアから移送されたナジ・グループにたいして、カーダールは刑法上の訴追を行い、裁判で決着させることに拘った。もっとも、ナジ・グループの移送や拘置の情報は、数ヶ月にわたって、中央委員にすら詳らかにされなかった。その間、カーダールは訴追理由と背景の調査を綿密に行うように指示した。もちろん、ナジ・グループの処遇はハンガリー共産党（社会主義労働者党）の政治局が決定するが、形の上で裁判所が自立的に決定するという体裁をとることに拘った。それはラーコシ時代の形だけの裁判で処刑するというスターリン主義的な専横を避けるためだったが、実体的には大差ないものだった。

ナジ・グループのハンガリー移送からナジ処刑までおよそ1年2ヶ月の時間がある。裁判にこれだけの時間を要したのはたんに準備に時間が取られただけではない。いかにハンガリー共産党にナジ裁判が任されたとはいえ、国際的な反響を気にするソ連共産党の意向を無視することができなかったからである。ソ連共産党内部のクーデターやフルシチョフの平和攻勢路線の展開が、ナジ・グループの裁判の行方を左右することになった。

ナジ訴追への準備

訴追の準備を進め、その報告を行うために1957年6月20日にモスクワに向かったカーダールは、十分な協議に行えないままハンガリーに戻った。クレムリンが異常に緊張している様子を肌で感じたカーダールは、一抹の不安感を抱きながらこの時期を過ごした。

事態の結末が明瞭になったのは7月4日である。ソ連共産党の公報は、モロトフ、マレンコフ、カガノヴィッチの除名、ヴォロシロフとブルガーニンの降格を発表したのだ。非スターリン化の行き過ぎを名目にフルシチョフ解任に動いた保守派が敗北した。

ソ連共産党政治局の勢力関係の変化はカーダールの権力安定化を助けた。この追い風に乗って、カーダールは8月の政治局会議でナジ・グループの裁判手順と判決内容の概要を決めたと言われる。しかし、このことはカーダールが死の

直前まで否定し続けたことだ。政治局が判決内容を決めたことになれば、ラーコシ時代と変わらないからである。フサール・ティボールによれば、ハンガリー共産党政治局の決定は9月にソ連共産党に伝えられ、その記録がソ連共産党政治局のメモに残されている。そこには、具体的な量刑は決められていないが、ハンガリー共産党政治局8月21日付けの決議として、「ナジ、ロションツィ、ドナート、ギメシュ、マリーテル、スィラージ、キライには最も重い刑を科し、その他の者については罪状と改悛に応じて罰する」というアンドロポフ署名のメモが残されているという。この決定にもとづき、9月から訴追に向けた最後の準備が始まった。

この年の11月、モスクワにおいて社会主義国の共産党・労働者党会議および国際共産主義運動会議が開催され、世界の共産党・労働者党の代表者が集まった。そのひとつの大きなテーマが、ハンガリー動乱の評価とその影響を討議であった。この会議では修正主義にたいする闘争路線が優勢を占め、それがナジ裁判開始の追い風になった。

1958年2月5日午前９時、ナジ・グループ裁判が開始された。予定では短期間に判決が出るはずであった。しかし、翌日に突然、訴追準備の不足という理由で、検察側が協議の延期を提案し、裁判が中止されたのである。

ソ連共産党の逡巡とカーダールの決意

もちろん、裁判中止はハンガリー側の事情によるものではなかった。ハンガリー側の意向に関係なく、ソ連共産党ではナジ裁判の国際的影響が分析され、2月5日の政治局会議でナジ・グループにたいする裁判の結論が議論された。「この裁判を死刑判決で終わらせてはならない」。これが政治局の決定である。

政治局内の保守派を追い出し、世界最初人工衛星スプートニク打ち上げに成功したフルシチョフは、ソ連のイニシアティヴで平和攻勢に打ってでようとしていた。世界が注目するナジ・イムレの命運をどう決めるかは、この政策展開に大きな影響を及ぼす。死刑判決を下し、即座に特赦を施せば、フルシチョフとソ連への国際的支持がさらに広がることは明白であった。

しかし、ソ連共産党がこの結論にどれほど拘ったのか明瞭でない。カーダールはナジ・グループ特赦の道を選ばずに、裁判延期の道を選択した。さらに、ナジ・グループの裁判を延期する一方、その他の者の裁判を継続し、処刑の手続きを行っている。そこにはカーダールの強い決意が表れている。

カーダールは、その長い統治の期間において、ソ連共産党の見解を受け止める姿勢を示しながら、他方で実際の行動ではそれに反する行動をとったことが幾度もある。ソ連共産党政治局はナジ特赦を決めたが、それを強力に強制した節が見えない。4月のフルシチョフのブダペスト訪問でも、フルシチョフはナジ・グループの処理はハンガリーが決める問題だと話したようだ。カーダールにハンガリーの統治を任せた以上、カーダールの意思を優先するというのがフルシチョフの考えだったのだろう。

他方、カーダールの決意は、ナジ・グループの訴追準備に入った段階からはっきりしていた。ソ連共産党の保守派が後退し、旧ラーコシ一派の復活の芽がなくなった時に、その決意が完全に固まった。残された問題はナジ・グループの処理である。これが終われば、動乱の処理が完成し、権力基盤が固まる。そのために、ナジ・グループを最終的に葬る。彼にはそれ以外の選択肢は残されていなかった。

カーダールは5月にモスクワで開かれた国際協議会に参加した際に、フルシチョフに訴追再開を談判したと思われる。フルシチョフの同意を取り付けたカーダールは5月末の政治局会議で裁判再開を決定した。

ナジ・イムレにたいする判決は6月15日午後5時に下され、翌未明の5時、ナジは絞首刑に処せられた。カーダールは多くの非難を浴びたが、ナジ処刑によって党内の権力的地位を堅固なものにしたのである。

ナジ・グループ亡命の謎を解く

ハンガリー軍事制圧の決断

ハンガリー動乱をめぐって、いまだ完全に解明されていないことがある。ハンガリーを軍事的に制圧し、ナジ政府に代えて、カーダールを首班に据えた臨時政府を樹立するシナリオはどこでどう立案されたのだろうか。その実行過程で何が計画通りに実現し、何が実現しなかったのだろうか。ナジ・グループは自ら進んでユーゴスラビア大使館に亡命を求めたのか、それともこの亡命劇は最初からソ連によって仕組まれたものだったのか。ユーゴスラビアはこの計画実行にどれほど関わっていたのだろうか。関わっていたとすれば、ユーゴスラビアの政治的な意図は何だったのだろうか。

ハンガリーの軍事制圧と臨時（傀儡）政府樹立の基本的なシナリオを描いたのはもちろんソ連共産党政治局である。まさに、ハンガリーが平静を取り戻そうとしていた矢先に、フルシチョフはハンガリーの軍事制圧を決断した。10月31日である。その日からフルシチョフは周辺社会主義諸国の了解を得る隠密行脚にでかけた。

このフルシチョフの決断を促したものは、戦後冷戦体制の境界変更の拒否である。もしここでハンガリーに譲歩すれば、ハンガリーが戦後社会主義体制から離脱し、ソ連の衛星国に空白地帯が生まれる。西側陣営にとってハンガリー１国のウェイトは小さいが、東側陣営にとっては致命的な損失を意味する。西側と東側ではハンガリー問題の重要性は天と地ほどの違いがあった。この世界情勢認識が西側政府の無関心とソ連のハンガリー武力制圧を決断させた。

国際協力の取得

フルシチョフの行動は速かった。11月1日にポーランド共産党第一書ゴムルカと国境町ブレストで会談し、軍事制圧の了解を求めた。ゴムルカは賛成しなかったが、ソ連の決定を尊重する姿勢を示した。この後、フルシチョフ一行はルーマニアに向かい、ルーマニア首脳とブカレストに滞在していたチェコ=スロバキアのノヴァオトニ第一書記から了解を取り付け、続いてブルガリアに飛んだ。

ここまでは特段の問題なしに進んだ。当時のソ連にとって気遣いが必要だったのは、社会主義建設で独自路線を歩む中国とユーゴスラビアである。ともに、ソ連の力を借りずに、パルチザン闘争で社会主義権力を築いた国であり、ソ連と同等の権利を主張する国である。

当時、毛沢東はハンガリー情勢の情報収集のためにモスクワに特使を派遣し、ハンガリーの成り行きを見守っていた。中国はソ連が武力を行使して東欧諸国を制圧することに批判的だったが、ハンガリーが社会主義陣営を離脱することは容認できないという一点でソ連と一致していた。フルシチョフは11月1日、中国に戻る特使を空港まで送り、車中でソ連の決断を説明し、毛沢東への義理を果たしていた。そして、最後に難敵ユーゴスラビアの説得にでかけた。

フルシチョフは飛行機と小船を乗り継いで、アドリア海に浮かぶ小島ブリオニに到着した。11月2日午後7時である。ブリオニにはティトーの別荘があり、フルシチョフとマレンコフは、ティトー、カルデリ、ランコヴィッツに迎えられた。当時のモスクワ駐在のユーゴスラビア大使ミツノヴィツも同席し、この極秘会談は翌朝５時まで続いた。

フルシチョフはそこからモスクワに戻り、３日午後からカーダールの説得に入った。既述したように、クレムリンには臨時政府首班候補としてソ連共産党が選定したミュニッヒとカーダールがハンガリーから連行されていた。軍事制圧作戦の実行はすでに４日未明と決められており、残された問題はソ連軍の進軍に合わせて臨時政府の首班を決めることだけだった。

もしカーダールが引き受けなかったらどうなっていただろうか。おそらく、ナジ・グループと同じ運命を辿っただろう。生き延びようとすれば、カーダールに選択肢は存在しなかった。

ブリオニで何が話し合われたのか。この極秘会談の内容は書面で残されていないが、会談に同席したユーゴスラビア大使のインタビュー記録が存在している。また、ナジ・グループの亡命受け入れからカーダール政府との交渉過程を語ったブダペスト駐在ユーゴスラビア大使のインタビュー記録も存在する。この極秘会談および大使館現場とユーゴ政府との交信記録を読み解けば、ソ連とユーゴスラビアとの合意内容と情勢の変化による合意破棄が明らかになってくる。

これを解明する前に、ユーゴスラビアとソ連、ハンガリーをめぐる当時の事情を知っておく必要がある。

ユーゴスラビアをめぐる確執

スターリンのソ連とティトーのユーゴスラビアの断交は1948年に始まる。スターリンは自らの権力を固めるために、共産党内や社会主義国からアメリカ帝国主義の手先を摘発するキャンペーンを始めた。国家としてやり玉に挙がったのは、スターリンのソ連に反旗を翻したユーゴスラビアである。それまで良好な関係にあったハンガリーでも、ラーコシがスターリンの威を借りて、アメリカのスパイ摘発と称してライク外相を逮捕・処刑し、返す刀で「ユーゴスラビア修正主義」を口汚く罵ることになり、ハンガリーとユーゴスラビアの二国間関係は最悪の状態に落ち込んだ。

1953年のスターリンの死去に伴い、フルシチョフはユーゴスラビアとの和解に努め始めた。1955年にフルシチョフのベオグラード訪問が、1956年6月にはティトーのモスクワ訪問が実現した。しかし、ラーコシが居座るハンガリーとの関係は、依然として冷え切ったままだった。

モスクワを訪問したティトーは、ユーゴスラビア社会主義の自主・独立権の承認、二国間の経済協力関係の推進のほかに、もう一つの要求をフルシチョフに突きつけた。それはハンガリーのラーコシ退陣である。ラーコシにたいするティトーの怒りは激しく、ラーコシはスターリン亡き後の中欧に君臨する最後のスターリニストだと考えていたようだ。こういう経緯から、ラーコシに虐げられていたナジ・イムレに好意を抱いており、ラーコシに代わってナジが実権を握ることを期待していた。

この6月のモスクワ会談の中で、フルシチョフはハンガリーへの軍事介入の可能性を示唆してユーゴスラビアを牽制しつつ、ハンガリー情勢の流動化に何らかの対処の必要性を認めたようだ。しかし、ラーコシを失脚させることは、反社会主義陣営を勢いづかせるという理由で、ソ連共産党はラーコシ退陣要求を受け入れなかった。その後、情勢がさらに流動化したために、7月に入ってソ連共産党はラーコシを見限り、同じくラーコシ一派のゲルーを共産党のトップの据えることで、事態の収拾を図ろうとした。

もしこの時点でナジに権力委譲が行われていたとしたら、状況は変わっていただろう。しかし、ソ連共産党はナジを修正主義者と評価しており、ソ連が切り出すカードに入っていなかった。ソ連共産党は、同じ修正主義に犯されたユーゴスラビアとナジのハンガリーが結託する危険も回避したかった。

ソ連とユーゴスラビアの駆引き

ユーゴスラビアは、10月24日のソ連の第一次軍事介入を厳しく批判した。6月のモスクワ会談で軍事介入の可能性を示唆したフルシチョフであるが、最終的な軍事制圧の了解を得るために、今一度、ティトーと腹を割って話し合う必要があった。パルチザン闘争を経験してきたユーゴ軍がハンガリー情勢に介入することになれば、それこそ第三次世界大戦を引き起こしかねない。事実、ハンガリーとの国境地帯は戒厳状態にあった。ハンガリーに肩入れすることはないだろうが、念には念を押して、ユーゴスラビアの了解を得る必要があった。

他方、ハンガリー情勢が混沌化する中で、ユーゴスラビア首脳の情勢判断が変化した。ナジ政府が10月30日に打ち出した複数政党制の容認とコシュート紋章使用許可にたいして、ティトーは明確な拒否姿勢を示した。複数政党制はユーゴスラビア体制の否定をも意味し、コシュート紋章は大ハンガリーの野望とも結びついているからである。

事ここに至って、ティトーは情勢を安定化させる能力に欠け、譲歩に譲歩を重ねるナジを見限ったのである。この点でフルシチョフの情勢判断と一致した。ブリオニの極秘会談ではこうした認識の交換とナジに代わる臨時政府樹立について意見が交換された。ソ連側はナジに代えてミュニッヒを首班とする臨時政府構想を提示したのにたいし、ティトーはカーダールを首班とする労農臨時政府の樹立を主張した。ソ連滞在が長いミュニッヒはソ連にとって都合が良いだろうが、それではラーコシやゲルーと同じ道を辿る。ティトーはほんの数週間前にベオグラードを訪問し、ナジ政府にいるカーダールを推したのである。

フルシチョフはティトーの提案に耳を傾けることで、ユーゴスラビアの顔を立てた。これでソ連側のユーゴスラビア問題は落着したが、ナジの処遇をめぐってさらに協議が続いたはずだ。首脳同士の話し合いだから、細かな手続きまで合意されたとは考えづらい。ユーゴスラビアがナジ（ナジ・グループ）の亡命を引き受けるとう原則的な合意が交わされたと考えるのが自然である。後にブリオニ会談の事実が暴露され、これが「ソ連とユーゴの結託」の証左として取り上げられることになるが、この結託は一時的なものにすぎないことに注意すべきだろう。

同床異夢のソ連とユーゴスラビア

ソ連側から見れば、軍事介入への了解を得ただけで、この極秘会談は成功だった。ナジ処遇は二の次である。他方、ユーゴスラビア側から見れば、カーダール政府の樹立とナジのユーゴスラビア亡命は同等の重要性をもつ。ナジ政府を構成している政治家がユーゴスラビア社会主義に親近感を寄せている以上、これは蔑ろにできないことであった。しかし、短時間の会談で、それも首脳同士の協議で、ナジ亡命の具体的な手続きを決めることは不可能だった。とりあえず、ユーゴ大使館で亡命者として受け入れるところまで決めたが、その後の手続きの詰めはなかったと考えるべきだろう。しかし、そのことが後々まで後を引く。歴史的事件には、相互理解の齟齬が後に大きな政治問題になる事例に事欠かない。

ソ連は軍事制圧後の事態沈静化に自信をつけ、ナジの影響力を徹底的に削ぐために、ユーゴスラビアへのナジ亡命を拒否する姿勢に転じた。ブリオニ会談の合意破棄である。ユーゴではなく、ソ連の指示通りに動くルーマニアへ「亡命」という体裁をとったのである。

ソ連にしてみれば、ユーゴスラビアにはこちらから出向いて義理を立てたし、ティトーの提案も飲んだ。軍事介入が成功したから、後は自分たちのやりたいようにやらせてもらう。他方、ユーゴスラビアには、フルシチョフにしてやられたという思いだけが残った。もちろん、ユーゴスラビアには国の存亡を賭けて、ハンガリーに介入する余力などなかったが、一度は顔を立ててもらい、二度目は顔に泥を塗られた。

当時のブダペスト駐在ユーゴスラビア大使ソリダリッツァは、退官の後、家族にたいして繰り返し、「我々はナジを売り渡した」と語ったという。ソ連にしてやられたという思いだけが残ったのだろう。

ナジ・グループ亡命の経緯

「ソ連とユーゴの結託」を検証するために、ナジ・グループのユーゴ大使館への亡命の経緯、さらに大使館を離れる経緯を知る必要がある。

ユーゴスラビア（大使館）への亡命は、誰が最初に提起したのだろうか。ナジ政府要人か、それともユーゴスラビア政府か。パウル・レンドヴァイの近著（1956 Forradalomról tabuk nélkül, Napvilág kiadó, 2006）によれば、ナジを含め政府要

人たちには亡命の意思も必要性もなかったが、ユーゴ大使からの緊急要請で、ソ連の軍事制圧が開始される直前の11月4日未明に、大使館から差し出された車で大使館に移ったことになっている。この説明はいわゆる「結託」説を支持するものである。レンドヴァイは、ナジ政府要人が家族の亡命について打診したことはあるが、要人亡命の打診はなかったと記述している。

他方、ユーゴスラビアの外交文書にもとづくフランコビッチ・ジョルジュの検証（セルビアで発行されている日刊紙Magyar Szóに2006年10月から11月にかけて連載された特集）によれば、ユーゴスラビアへの亡命はナジ政府要人から打診されたとなっている。ソリダリッツァ大使はユーゴ政府の訓令を受けて、連日、ナジ政府要人との会談を続け、情勢分析報告を本国に送付している。この一連の会談の中で、ナジ政府要人から二つの要請が提起された。一つはユーゴスラビア軍との協力関係の樹立であり、いま一つはナジ政府要人のユーゴスラビア亡命である。この亡命問題については、ナジ政府が継続していた数日間に、何人かの要人が折に触れて提起していたようだが、政府要請として正式に提起されたのは11月2日である。

党幹部の1人であったサントー・ゾルターンは、11月2日にソリダリッツァ大使を訪問し、「党や政府の要人が脅迫を受ける事態におけるユーゴ大使館による亡命受け入れ」の是非について公式回答の要請を行った。ブリオニ極秘会談が始まる直前のことである。ユーゴ政府の公式（受け入れ）回答が翌日、サントーに伝えられた。もしそうであれば、ティトーはナジ政府要人の亡命要請を前提に、フルシチョフとの交渉を始め、その交渉結果にもとづきハンガリー大使に亡命受け入れの訓令を送ったと考えられる。

フランコヴィッチによれば、「未確認情報」だが、ティトーはフルシチョフとの会談の中で、「もし東から攻撃しないなら、我々が南から攻撃する」と語ったようだ。その真意は明らかでない。フルシチョフの歓心を惹くためか、あるいはユーゴ軍の存在を誇示するためか。

大使館からの移送

ユーゴスラビア大使館への亡命とカーダール臨時政府の樹立で、ブリオニ会談の合意が実現した。しかし、亡命者のユーゴスラビアへの移送は簡単に実現しなかった。

武力制圧による安定化に成功したソ連は、カーダール臨時政府に国内を掌握させ、二度とこのような混乱を起こさせないようにしなければならない。しかし、ナジ・グループの存在は常に撹乱要因になる。国内での放免はありえないが、修正主義が蔓延るユーゴスラビアへの亡命を許せば、彼の地で再びナジ政府が正統性を主張する可能性がある。これを許せば、ソ連を中心とする社会主義陣営の求心力が弱まる。したがって、ナジ・グループのユーゴスラビア移送は阻止する。これが11月16日にカーダールに伝えられたソ連共産党の方針である。

カーダールはこのソ連の方針を受けながら、事態打開のために19日にブダペストを訪問したユーゴスラビア外務副大臣ヴィディツァとソリダリッツァ大使と協議を続け、「ユーゴスラビア大使館に亡命したナジ・グループの人々は、過去の行為による処罰を受けることなく、平和的に自宅へ戻る」ことで合意した。ソリダリッツァ大使とミュニッヒ内務大臣は11月21日深夜、合意実行として、「翌日夕刻18:30分」にナジ・グループが大使館を離れることを決めた。

移送用のバスが大使館に横付けされ、子供たちが勇んで乗り込んだ。当時の大使館一等書記館によれば、「ナジは運転手に声を掛けたが答えはなかった。そこでいったんバスから降りた。大使は留まって良い、バスに乗らない方が良いと忠告したが、ナジは悟ったように再びバスに乗り込んだ」という。バスを追跡した大使館の車は、途中でソ連の軍用車に行方を遮られた。

ソリダリッツァ大使は翌朝、カーダールとの面会と電話を要求したが断られ、即座にカーダール宛の書簡を送ったが、何の返答もなかった。以後、再び、ソ連とユーゴスラビアのイデオロギー的対立が先鋭化することになった。

第 3 部

動乱を招いた暗黒時代

権力犯罪とどう向き合うか

ショーヨム大統領は健康保険の部分的民営化法案を議会に差し戻した。社会的コンセンサスに欠けるというのが本音だが、憲法裁判所の判断を仰ぐことなく、国会への再審議に委ねた。憲法判断になるかもしれないという政府与党の危惧は回避されたが、健保民営化は国民投票に値する問題だという意見は野党や知識人の間に根強い。授業料や診察料など比べてはるかに重要なテーマだ。

健保民営化はSZDSZが強引に推し進めたものだが、とくにSZDSZ系の経済学者が精力的に動いた。元大蔵大臣のボクロシュ・ラヨシュ（現、中欧大学学長）は理論的なキャンペーンを張り、バウエル・タマーシュがイデオロギー的な先導（扇動）役を担い、ミハーイ・ピーテルは法案作成のコンサルティング業務を担当した。

この3名の中で、バウエルのメディアへの露出が際立っていた。12月初めに法案に反対する知識人が反対声明を出したのにたいして、バウエルは「健康保険改革法案へ反対する人々へ」と題する批判声明の署名で対抗し、12月14日発行の ***Élet és Irodalom*** 誌にストを組織しているガシュコー・イシュトヴァーンを弾劾する長文の批判文（全面2頁）を出して、スト参加者を牽制した。バウエルは「法案反対者の行動は社会の進歩に反するもの」と大仰な批判を展開したが、安易な民営化を批判するのは知識人の当然の行為だ。

腰が引ける知識人

何人かの友人たちに、署名要請メイルの諾否について尋ねた。多くは双方（法案反対者と法案賛成者）からメイルを受けたが、どちらにも署名しなかったと答えた。政治にかかわりたくないからだという。国会に任せれば良いと答えた者もいる。法案を判断する指針がないからかもしれないが、その腰が引けた態度にハンガリー人特有のアパスィーを感じた。

法案批判陣営のフェルゲ・ジュジャから声明文を送ってもらった。彼女たちはボクロシュやバウエルを「ネオリベ（ネオリベラル）の坊や」と呼んで蔑視している。他方、社交性のない彼のバウエルがどうしてこれほど意気込んでいるのか、バウエルの誤った議論が他の経済学者から批判されることなくどうして放置されているのだろうか。友人の経済学者は、「確かに問題はあるが、政治家になった経済学者と議論しても意味がない」という。

それにしても、バウエルの行動や論理を誰も批判しないのは不思議だ。バウエルの背後に何か存在するのだろうか。昨年8月にはホルン首相への叙勲を大統領が拒否した問題について、バウエルは例のごとく長文の文章を発表して、ホルンの功績を讃えて、大統領批判を行った。何故バウエルがホルン叙勲を擁護しなければならないのか。このことも気になっていた。

「爪はがしのバウエル」

バウエルの父が保安警察（ハンガリーの秘密警察）の大佐だったことは聞いていた。56年動乱で殺害されたとも聞いた。不幸な育ちだから、子供じみた社交性のない行動様式をとるのだと納得していた。ところが、そのことを友人に話したら、「とんでもない、動乱で死んだなんて嘘だ。まだぴんぴんしている。それも彼はただの秘密警察官だったのではない。＜爪はがしのバウエル＞と恐れられた取調官で、ほんの少し前に国会でその問題が取り上げられたばかりだ」という。

迂闊にも1999～2002年にかけて、「爪はがしのバウエル」こと、バウエル・ミクローシュの名前が、国会やメディアで飛び交っていたのを見逃していた。

インターネットで調べたら、2000年初頭に歴史公正委員会が、SZDSZの議員で弁護士事務所

を開いているエリョシ・マーチャーシュにたいして議員辞職を勧告している。その理由は、バウエル・ミクローシュなどの悪名高い旧保安警察官と共同で事務所を構えていたからである。これにたいして、エリョシは「バウエルの過去を知らなかった。近いうちに、バウエルは弁護士事務所を離れる」として、委員会の辞職勧告に答えた。しかし、過去を知らなかったというエリョシュの説明を信じる人はいない。実際、バウエル・ミクローシュは、このエリョシの言明を「裏切り」と表現して、不快感を表した。

これに関連して、国会では「バウエルが弁護士資格をとった経緯を明らかにするように」という議員からの質問があり、当時の法務大臣が調査を約束している。

さらに、2000年の9月に、当時の小地主党議員がダーヴィッド法務大臣にたいして、バウエル・ミクローシュの経歴を紹介し、「当時の法務大臣リース・イシュトヴァーンが1950年9月15日に保安警察の取り調べにおいて死亡して件」について調査を求めた。これにたいして、法務政務次官は、「調査は継続中である」と回答している。

当時、この討議の中で、SZDSZ議員だったバウエル・タマーシュが登壇し、「父は戦前からの反戦運動家で、戦後はその言語能力を見込まれて保安警察官になったが、取調官であったことはなく、7年間の在勤中に取り調べにあたったのはたったの2回で、確かにそのうちの1回はリース・イシュトヴァーンの取り調べだったが、非難されるような暴力行為は行っていない。．．．．体制転換で息子や同僚が政治家になり、今それらの人々が右派の政治家から攻撃を受けているのは不幸なことだ」と反論した。

要するに、父は何の罪も犯していないし、責任を取る必要もない。これは政治的な攻撃だというのだ。

過去の権力犯罪とどう向き合うか

戦後のハンガリー共産党の再組織化からラーコシ独裁に至る過程は、共産党が暴力的に権力を奪取した時期にあたる。共産党が国家機構とは独立した武装組織をつくり、独裁権力の維持を脅かす人物を次々と拘束し、拷問を加え処刑し、スターリン型の恐怖独裁を構築した苦い時代だ。1946年から1953年まで続くこの時期に、想像もできないような奸計が図られ、多くの命が失われた。日本ではこの時代の正確な情報が伝えられず、歴史学界では中・東欧の社会主義樹立を「人民民主主義革命」と規定する説が大勢を占めたが、現在から見れば、この規定は明確な誤りである。

1956年動乱はまさにこれらの失われた命の鎮魂と名誉の回復を求めたデモ行動が拡大して起きた歴史的事件である。ラーコシ独裁時代に両親たちが犯した歴史的犯罪にたいして、娘や息子、さらには後世の世代はいかに向き合うべきか。ハンガリーではこのような問いかけを発する人はほとんどいない。それにはいくつか理由がある。

一つは、ハンガリーでは民族の歴史的悲劇を祝日として鎮魂するが、自民族の戦争犯罪や権力犯罪にたいする責任を後世の世代が受け継ぐという倫理観念が希薄である。

二つは、カーダール政権が動乱参加者の大量逮捕・処刑に全力を注いだために、ラーコシ独裁政権を支えた集団や個人の犯罪的行動への対処・告発が事実上、見逃されてしまった。

三つは、ハンガリーの体制転換が「平和的」に行われた結果、過去の権力犯罪の検証と告発が中途半端になってしまった。

四つは、与党にも野党にも、トップの指導者の家族やその周辺に保安・秘密警察に関係した者がいるために、追求の矛先が鈍ってしまう。

この結果、バウエル父子のように、父が自らの犯罪も責任も認めず、子もそれに同調する者が多く、それがハンガリーの権力犯罪にたいする倫理意識を限りなく低めている。

もっとも日本にも同類の問題が存在する。バウエル・ミクローシュが果たした役割は、戦前日本の特別高等警察（特高）と類似したものだ。特高による反戦主義者・民主主義者・共産主義

者の拷問・虐殺も、戦後そのほとんどが見逃されてしまった。作家小林多喜二が特高警察に捕まり、逮捕から半日もしないうちに命を落としたが、虐殺に直接手を下した連中や特高部長も、戦後の日本で大手を振って生きてきた。

バウエル・ミクローシュ問題が公になってから、SZDSZ内の内部対立が激しくなり、バウエルは2004年の総選挙に立候補できなかった。権力犯罪に深くかかわった父を擁護するバウエル・タマーシュに、連立政権の社会政策に反対する人々を批判する資格があるのだろうか。それとこれとは別だと割り切れるだろうか。

国家保安警察（ÁVO、ÁVH）

ナチスドイツの進駐、それをバックに跳梁したハンガリーのファシスト集団「矢十字党」の暴力行為によって、終戦間際の短期間にハンガリーのユダヤ人の数多くがアウシュヴィッツへ送られた。この悲劇を生き延びたユダヤ系の若者にとって、ファシズムと戦い、戦後に再建された共産党へ加わることは、自然なことだった。

バウエル・ミクローシュは終戦と同時に、ハンガリー共産党へ入党した。一足早く、シェーンボルク・ユーディットとその弟センディ・ジョルジュも入党していた。ユーディットとミクローシュはほどなく結婚した。この彼ら3名は1945年１月に創設されたばかりの政治警察（PRO, Politikai Rendészeti Osztály）に入り、やがてバウエルとセンディはやり手の取調官として名をはせることになった。

この政治警察は共産党が権力の武力装置（警察・軍隊）を掌握するために組織されたもので、形式上はブダペスト警察本部の一部として創設されたが、実態は共産党の警察武力組織であった。ユダヤ系の青年が多数を占めるように組織され、「ユダヤ人の復讐心」が利用された。

翌1946年に、この政治警察は国家保安警察（ÁVO, Államrendőrség Államvédelmi Osztály）に組織替えされ、共産党が握る内務省管轄下に置かれたが、実態は変わらなかった。そして、カーダール・ヤーノシュが内務大臣になった1948年9月に、内務省の国家保安局（ÁVH, Államvédelmi Hatósága）として、自立した組織形態をとることになった。いわば共産党の私権力が国家権力として、公認されたのである。

1946年のPRO名簿によれば、バウエル・ミクローシュは第15課の課長を務め、その部下としてセンディ・ジョルジュとペトゥー・ラースロー（SZDSZの元委員長ペトゥー・イヴァーンの父親）が配置されている。PRO創設からの保安警察のメンバーはいわばエリートで、彼らは新しい世界を作るという希望と信念で共産党に加わったが、次第に権力・暴力装置としての役割を体現して、強権的に告発した「敵」を拷問し、処刑する道を辿ることになった。

PRO、ÁVO、ÁVHの組織を創設から一貫して現場で指揮してきたのが、悪名高いピーテル・ガーボルである。事実上、ピーテルの行動を監督する上司はおらず、すべての指令は直接、ラーコシからピーテルに伝えられた。ラーコシはスターリンを習い、共産党権力の武力装置を掌握することで、自らの独裁的地位を維持するようになったのである。

当時、共産党はラーコシのほか、ゲルー・エルヌーとファルカシュ・ミハーイが最高幹部に名を連ねており、これら3名はトロイカとよばれていたが、その力関係は対等なものではなかった。ゲルーは経済問題、ファルカシュはラーコシの腹心として内務問題を担当していたが、スターリンの信頼厚いラーコシはこの2人の上に君臨していた。

ファルカシュの息子ヴラジミールは短期間のモスクワ滞在からブダペストに戻り、父の片腕として、政治警察の現場に入り、各種の奸計の立案と拷問の現場に居合わせることになった。バウエルやセンディなどの精鋭は、ピーテルやファルカシュの有能な部下として、各種のフレームアップに重要な役割を果たしていった。

容疑者の拘束、拷問が行われたÁVO、ÁVHの本部は、アンドラーシ通り60番地にあった。今、それが「恐怖の館」博物館になっている。

ノエル・H・フィールド拉致事件

1949年5月、現職の外務大臣で共産党政治局員のライク・ラースローが逮捕され、同年10月に処刑された衝撃的な事件は、戦後の東欧社会主義形成期の象徴的な出来事として、世界史に記されることになった。当時、隣国でも同様な事件が相次ぎ、チェコスロバキアではスランスキー共産党書記長、ポーランドではゴムルカ共産党書記長が除名・逮捕され、ゴムルカは処刑を免れたが、スランスキーは処刑された。

これら一連の事件は、共産党が他政党との連立政権から共産党単独による社会主義政権樹立を目指す過程で仕組まれたもので、各国にスターリン型の独裁権力を創出しようとするソ連の意向を受けて意図的に作為されたものであった。

その発端となったライク事件はいまだ謎の部分があるとはいえ、かなりの所まで解明が進んでいる。ライクを「アメリカ帝国主義のスパイであり、ティトー修正主義に犯された敵」と証拠立てるものは何もなかった。しかし、スターリンのソ連とスターリンの忠実な生徒ラーコシは、あらゆる人的な繋がりをつなぎ合わせて、ライクを「敵」に仕立てた。そのシナリオの重要な鍵になったのが、アメリカ人ノエル・H・フィールド拉致事件である。

社会民主党の吸収

戦後直後の中・東欧の共産党勢力は微々たるものであった。しかし、反ファシズムを闘ったという倫理的な優位性とソ連軍の進駐という環境の中で共産党の影響力が拡大し、支持基盤以上の力を発揮することになった。戦後確立した議会制民主主義の中で、共産党は連立政権構築に努めたが、他方で秘密保安部隊を創設して、他党幹部の動静を探り、次第に共産党と政治的に対立する人物を粛正する方向に向かった。ÁVO、ÁVH はその実行部隊だった。

当時、この共産党の私権力とも言える政治警察の本部はアンドラーシ通り60番地にあり、ここが秘密諜報基地となっていた。隣接するチェンゲリ通りには電話盗聴設備が設置され、治安警察に所属する隊員の夫人たちが共産党に対抗する人物の電話盗聴を行っていた。この盗聴舞台はやがてハンガリー駐在外交官の盗聴へと拡大されることになった。さらに、中央郵便局にはやはりÁVOから封書開封部隊が送り込まれ、カーダール夫人だったタマーシュカ・マーリアはこの部隊で働いていた。

ÁVOの活動は当時の法律に照らしても違法であった。そのため、共産党は内務大臣ポストを確保し、これらの私的権力活動に法的な位置づけを与えることに気を配ったが、それは形式上のことだけで、内務省管轄下に入っても、この部隊は共産党の私的暴力装置という性格を変えなかった。

1948年6月、ハンガリー共産党は社会民主党を吸収してハンガリー勤労者党（Magyar Dologozók Párt）として再出発した。この合同において、共産党から９名、社会民主党から5名の合計14名で新党の政治局員が構成された。共産党から名を連ねたのは、トロイカの３名の他、レーヴァイ・ヨージェフ、ナジ・イムレ、ライク・ラースロー、カーダール・ヤーノシュ、コッシャ・イシュトヴァーン、アプロー・アンタルである。アプローはライク粛正を決定した時の政治局員であるにもかかわらず、1956年のライク復権集会でも共産党を代表して演説を行った。1988年の社会主義労働者党解党に至るまで長期にわたって権力の頂点に居座った人物である。ジュルチャーニ首相夫人の母方の祖父に当たり、FIDESZも批判しているように、アプローが共産党幹部として使用していた邸宅が、現在のジュルチャーニ首相夫妻の私邸でもある。

この社・共合同によって、ハンガリーには事実上の共産党独裁権力が樹立された。他の中・東欧諸国でも同じ社・共合同が画策され、戦後一時期続いた多数政党による連立政権が、共産党主導の独裁政治に変貌したのである。

ユーゴスラビア除名

戦後一時期の米ソ蜜月時代が終わり、二大大国は覇権の確保・拡大に努め始めることになり、戦後世界は冷戦時代に突入した。社・共合同はまさにソ連の覇権を確保するために、各国の連立政権を共産党独裁政権へ移行させる前提条件であった。

そして、さらにソ連の影響力確保のために、ソ連型社会主義とは異なる道を選択するユーゴスラビアを国際共産主義運動から破門（1948年6月）し、中東欧各国共産党に危機感を煽り、スターリン主導のソ連型社会主義の建設を押しつけたのである。スターリンと同様に、共産党内に「敵」を見つけ、それを排除する各種の「奸計」が企てられ、それぞれの国で個人崇拝的な権力構造が樹立された。

1948年9月、ソ連内務省のブダペスト代表部代理クレムニェフが、ライクに代わって内務大臣ポストを得たカーダールと面会し、ファルカシュ・ミハーイの息子のヴラジミールがこの時の通訳を担当した。「ハンガリーは他の東欧諸国と違って、内部の敵や民族主義者との闘いが不十分だ」と注意を喚起するのが、この会談の目的だった。この会談の趣旨を踏まえ、ラーコシはÁVH内に特命部隊を設置した。スーチ・エルヌー率いる部隊がそれで、ピーテル・ガーボルの直接の指揮下に置かれ、共産党内部の「敵」を摘発するために特別の権限を与えられた秘密組織であった。

ここから、ÁVHはそれまでの共産党の政敵の摘発から、共産党内部の「敵」の摘発に向かった。「内部の敵」は小物であってはならない。十分にインパクトのある大物でなければならなかった。

亡命共産主義者の摘発－ダレス機関の関与

ラーコシが何時の時点からライク粛正を考えついたのか分からない。いくつか理由は挙がられるが、それも憶測に留まる。

ソ連内務省、したがってスターリンの命を受けたラーコシは、まず戦中に西欧へ亡命した共産主義者で、戦後になってハンガリーに戻った者に狙いを定めた。当時の共産党はどこも三層の指導者、つまり「モスクワ亡命者」、「国内非合法闘争者」、「西欧亡命者」から構成されていた。ハンガリーのトロイカあるいは「４人組」は皆、「モスクワ帰り」である。彼らが標的になることない。しかし、政治局の残りのメンバーには西欧亡命者がおらず、ライクもカーダールも「国内残留組」だった。

当時、戦争前からスイスに居住し、ハンガリー軍の諜報部員として働いていたフェレンツ・エドモンドは、戦中・戦後の亡命ハンガリー人の動向を報告していた。その報告の一つに、スイスからハンガリーに戻り、党の中央委員として党本部に勤務するスーニィ・ティボールの名があった。

戦時中、ヨーロッパにおけるアメリカの外交・諜報の指揮者として、アレン・ウェルシュ・ダレスが駐在していた。ダレス家は華麗な一族で、アレンは国務長官を務めたジョン・フォスター・ダレスの実弟である。プリンストン大学を卒業して外交官となり、レーニンのアメリカ渡航ビザ拒否時の外交責任者として知られ、1944年にヒットラー暗殺にも加わった経歴がある。戦後設立されたCIAの第5代長官に就任したが、文民長官の就任は彼が初めてで、1953年から1961年までの長期にわたって長官職を努めた人物である。

終戦直前、ダレスは亡命共産主義者の支援活動にも加わり、スイスのベルンに拠点を置く米軍の諜報機関OSS（Office of Strategic Service）の責任者として活動していた。ハーヴァード大学を卒業して外交官になり、その後生まれ故郷のスイスに共産党員として戻ったノエル・H・フィールドも、同様の支援活動に加わっていた。

フェレンツ・エドモンドが、スーニィ・ティボール等スイス亡命組のハンガリー帰還の詳細をフィールドから聞き、これを報告していた。それによれば、「1945年1月6日、スーニィ・ティボール他4名は、ユーゴスラビア共産主義者から取得した偽の軍医証明書を使って、マルセイユ、ナポリ経由でベオグラードに入り、そこでユーゴスラビアの要請に応じて軍医証明書を廃棄し、セゲドへ入った」という。マルセイユからナポリへはユーゴスラビアが手配したアメリカの軍用機を使ったとある。まさに、アメリカとユーゴスラビアの諜報機関の手助けで、ハンガリーに戻ったことになる。この古い事実が証拠とされ、党本部に勤務するスーニィ一派は、「アメリカ帝国主義とユーゴスラビア修正主義のスパイ」と決めつけられることになった。

他方、この諜報活動を行っていたフェレンツ・エドモンドは、ライク裁判が行われている1949年9月、オーストリアのソ連占領地域からアメリカ占領地域に出向いた後、消息が分からなくなった。二重スパイであったと考えられる。ここからライク事件は「アメリカの挑発」によって惹き起こされたと考えることもできるが、二重スパイからライク事件へ繋げる論理は飛躍している。

ノエル・H・フィールド拉致事件

ラーコシはスーニィ摘発と同時に、これらスイス亡命共産主義者に手を貸していたフィールドに関心をもった。フィールドの人脈からさらに多くの亡命共産主義者の氏名が出るだろうからである。

ロンドンに生まれ、スイスで育ったフィールドは、生物学者の父の死後、アメリカに渡り、ハーヴァード大学を卒業して、外交官になった。その時に、亡命ドイツ人を介して、ソ連共産党員になり、共産主義となってヨーロッパに渡った。フィールドは中欧で亡命共産主義者の支援活動を行っていたが、戦後、アメリカで彼に対する訴追が準備されそうになり、新たな定住地を求めて、チェコスロバキアや東ドイツの諜報部と関係を保っていた。1948年当時、東ドイツに移住すべく、定住申請への回答を待つ状態にあった。

フェレンツ・エドモンドの通報によって、ハンガリーのÁVHはフィールドがチェコスロバキア諜報部と関係が深いことを知り、フィールドをハンガリーに拉致する計画が立案された。

こうして、1948年から1949年にかけて、大がかりな国際的な奸計が仕組まれた。チェコスロバキア諜報部はフィールドの拉致・引き渡しをすぐには受諾しなかった。ソ連の許可がなければ承諾できないという態度をとった。ラーコシとピーテル・ガーボルはソ連内務省の中・東欧責任者ベルキンの了解をとり、チェコスロバキア諜報部に、フィールドをプラハに招聘するように依頼した。

ドイツの移住許可を待つフィールドは、チェコスロバキア諜報部の招聘に応じて、５月初めプラハに向かった。5月11日午後3時半、パレス・ホテルにチェコスロバキア諜報部員が出向き、彼を車で郊外に連れ出した。そして、そこに待ち受けていたスーチ率いるハンガリーの拉致実行部隊に引き渡したのである。スーチはクロロホルムをかがせ、その日のうちにフィールドをハンガリーに連行した。

フィールドはアンドラーシ通り60番地に拘置されたが、すぐにノルマファ近くのエトヴォシュ通りにあるÁVHの秘密の館に移送された。フィールド拉致は最重要機密であり、一部の幹部のみが関知した事柄だった。この館で始まった尋問には、ファルカシュ・ミハーイ、カーダール・ヤーノシュが直に関わり、スーチ配下のバウエル・ミクローシュとセンディ・ジョルジュが取り調べおよび独語通訳を担当した。

この時、ファルカシュ・ヴラジミールは隣室で尋問の録音を担当しており、「スパイ容疑」を否定するフィールドに激しい拷問が加えられたことを告白している。拷問によって強制された告白は二転三転するが、フィールドは自らの筆で、中欧における共産主義者の知人名を記した。そして、スイスにおいて亡命ハンガリー共

産主義者とコンタクトがあったこと、スーニィと顔見知りであったことを認めた。

ラーコシにはこれで証拠十分だった。フィールドの記した氏名リストは即座にラーコシに届けられ、ラーコシはこれをチェコスロバキア、ポーランド他の近隣国の共産党幹部に送った。このリストはそれぞれの国で、その後の「アメリカのスパイ」摘発に利用された。

消えたアメリカ人

フィールド拉致は極秘のアクションだった。当初、フィールドの妻ヘルタは夫との連絡が途絶えたことを心配しておらず、東ドイツへ向かったものだと考えていた。しかし、しばらく時が過ぎ、事故に遭ったのではないかと心配になり、チェコスロバキア諜報部に出向いた。諜報部員は国境付近にフィールド失踪の手がかりがあるとヘルタを車に乗せ、ハンガリー国境に向かい、そこでハンガリー諜報部隊に引き渡したのである。

ヘルタが消える前、フィールドの弟であるヘルマン・フィールドはヘルタの知らせにヨーロッパに渡り、ワルシャワでの所用を済ませてプラハに戻ると言ったまま、音信不通になった。ポーランドの諜報部に逮捕されたのだった。

さらに、フィールドの養女エリカ・ヴァラックはドイツの共産主義者の仲介を得て、ベルリンに向かい、両親の消息を探ろうとしたが、ソ連占領地に入ったまま消息不明になった。

かくして、フィールド一家はそれぞれがハンガリー、ポーランド、ソ連の諜報部隊に拘束され、消えてしまったのである。

フィールド拉致はライク裁判においても極秘事項だった。そして、もしその後に起きた亡命事件が発生しなければ、フィールド拉致事件は永遠に知られることなく、闇に包まれたままに歴史の中から消えるはずであった。

フィールド釈放事情

フィールド逮捕からすでに5年半が過ぎた1954年秋、ラーコシは治療目的でソ連に滞在していた。そこへポーランド統一労働者党第一書記ビェルトが突然やってきた。緊急の用件でモスクワに出向いてきたのだ。

ポーランド諜報部幹部ヨージェフ・スィヴィアトゥオが、前年暮れのベルリン出張時に亡命し、ヘルマン・フィールド拘束の事実が公になり、アメリカから外交ルートを通して、引き渡し要求が来ているというのだ。それで、慌ててモスクワに飛んで来た。ヘルマン・フィールドを釈放し、名誉回復しないとまずいという。ラーコシは暫く時間が欲しいと答えたが、その日のうちにノエル・H・フィールドの釈放指示を出した。

フィールドは1954年11月17日に自由の身になった。釈放されたフィールドは定住地がないこと、共産主義者としてアメリカに渡る訳にはいかないことを理由に、ハンガリーへの亡命申請を行い、1970年に亡くなるまでハンガリーに留まった。東独で消えた養女のエリカ・ヴァラックはベルリンからソ連へ移送され、スパイとして死刑判決を受けた後に15年の懲役に減刑され、シベリアの労働キャンプにいた。フィールド一家の釈放に合わせて、1955年に釈放された。

フィールド尋問からライク逮捕へ

さて、フィールド尋問によって、ラーコシの奸計は最後の段階を迎えた。フィールドの供述にもとづき、中央委員の重責を担い、共産党本部に勤務していたスーニィ・ティボールとその部下サーライ・アンドラーシュが、5月18日に逮捕された。実際には、フィールドの供述以前から、ユーゴスラビア共産党の支援を受けた亡命者たちの逮捕は計画されていた。時間的な順序だけが問題だったのだ。

スーニィとサーライの尋問にも拷問が加えられ、5月23日、スーニィの口からライクにかかわる一つの事実が語られた。ライク粛正の口実を得たラーコシは、バラトンリガの別荘に４人組に加えカーダールを呼び、ライク逮捕の意思を伝え、拘束手順について意見を求めた。

ライク･ラースロー処刑事件

ライク・ラースローは1949年5月30日の逮捕の瞬間まで、自らが粛正の標的になっていることを知らなかった。その前日には、バラトンリガで静養するラーコシを夫婦で訪ね、帰り際にはラーコシが「今度は、息子を見に行くからな」と声をかけてもらったばかりだった。長男（ライク・ラースロー・ジュニア、SZDSZ創設者の1人）が生まれてまだ5ヶ月も経っていなかった。しかし、ラーコシはすでにこの1週間前にライク逮捕に向けた筋書きを練り上げていたのだ。

ライク逮捕の経緯

5月11日に拉致されたフィールドの「自白」によって、スーニィ・ティボールが逮捕されたのは18日。そのスーニィは、23日に決定的な「自白」を強要された。「スイスにおいてアメリカのスパイ、フィールドとコンタクトをもった」、と。ラーコシは「スーニィの逮捕で終わらせるな、黒幕を暴き出せ」とハッパをかけた。ピーテル・ガーボル等ÁVH幹部はライクに狙いを定め、フィールド尋問でライクの写真を紛れ込ませた多数の顔写真を与え、知っている人物を挙げさせた。拷問を受け続けたフィールドにはもう誰でも良かった。面識のないライクの写真を見て、「見たことがある」と自白したのだ。

こうして、「スーニィとフィールドの黒幕であるライクは、中・東欧における共産党に紛れ込んだアメリカの重要スパイの1人であり、ユーゴスラビアの手先」というシナリオが完成した。

このスーニィの自白を携えて、ファルシュ・ミハーイはプラハ滞在中のビェルキン（ソ連内務省中欧責任者）と打ち合わせるべく、プラハへ飛んだ。ラーコシはライク逮捕の是非について、スターリンに事前許可を求めているはずであるが、中・東欧における共産党内のスパイ摘発の総元締めビェルキンと密接に連絡をとり、それぞれの国における「敵」の摘発を連動させる必要があったと考えられる。

ビェルキンの了解をとったファルカシュはブダペストに戻り、ピーテル・ガーボルとともにフェリヘジ空港からバラトンリガのラーコシの許へと急いだ。この報告を受け、ラーコシはゲルー、カーダール、レーヴァイに招集をかけた。この会合は5月29日夜あるいは5月30日の早朝に行われたと言われる。

この会合において、ラーコシはライク逮捕の決断を伝えた。当初、レーヴァイが保留の態度を示したとも言われている（レーヴァイはモスクワ療養中に、ライクの容疑について疑問を呈しており、この時の留保がラーコシ会談時の留保と混同された可能性もある。レーヴァイがこの会合に参加したというのは、ファルカシュ・ヴラジミールの推測である）。カーダールも躊躇したと伝えられているが、スターリンの了解を得たシナリオを変えることはできない。

説得されたカーダールは、逮捕の手順を問うラーコシにたいして、積極的に「チェスゲームに誘い、そこで逮捕する」というアイディアを出した。「30日午前に党本部の会合に招集し、午後にサバッチャーグヘジの党保養所でチェスを約束させる。それが終わったら帰宅の途につくから、そこで逮捕すれば良い」、と。これは後にカーダールが自慢げに、党学校の講義で何度も披露した手柄話として知られている。これに加え、ラーコシは赤子を抱えるライクの妻ユーリアも逮捕することに決めた。そして、すべてはこの筋書き通りに運ばれた。

ライク尋問

当時、ラーコシの私邸はXII区のローラント通りにあった。オルヴァン・テールからイシュテンヘジ通りを800mほど上った左手ある狭い通り

で、そこを入ってほどなく左手にある邸宅だ。ローラント通りからイシュテンヘジ通りを1kmほど上ると、登山電車の踏切にぶつかるが、そこからエトヴォシュ通りが始まる。この道沿いにあるÁVHの秘密の館でフィールドの尋問が行われていたが、ライクもそこへ連行された。

ライクはフィールドを知らないし、スーニィが「アメリカとユーゴスラビアのスパイ」であることなど信じるはずがなかった。ライク尋問から何の証言も得られなかった。そこでピーテル・ガーボルは拷問の指示を出した。取調官が平手打ちを食わせるのは日常茶飯事だったが、それ以上の拷問には別の専門グループが対応した。後にÁVH幹部を拷問死させることになるプリンツ・ジュラ率いる一団がそれで、殺さぬ程度に拷問を加えることが彼らの仕事であった。しかし、激しい拷問が加えられたにもかかわらず、ライクは強要された「自白」を拒否した。

ここでいったん拷問が中止され、今度は48時間連続で取り調べるという方法がとられた。ÁVHからは取調官が総動員され、２～３時間ごとに取調官が交代し、ライクに睡眠時間を与えることなく「自白」が強要された。そして、その最後の取調官として、カーダールが対応することになった。

声を上げる他の取調官と違い、カーダールは静かな口調で、「自らの罪を認め、党に実害を与えたと告白すべきだ。私はラーコシと全党を代表して君と話している。率直に告白することで、救われることもあるのだ」、と。要するに、「共産主義運動に犠牲者（生け贄）が必要だ」と伝えたのだ。これが転機となってライクは自らの運命を悟り、ラーコシの筋書き通りに「自白」したとされる。

この間、他の政治局員は事の進行をほとんど知らされなかった。6月25日、スポーツ体育館で開催されたブダペスト活動者会議において、カーダールが総括報告を行い、大会は「ライクに死刑判決を！」の決議案を採択した。まさに共産主義ファッシズムそのものであった。そこに出席した政治局員で、事の真相を知っているのは、カーダールただ1人であった。後に権力の座に就いたカーダールにとって、ラーコシに従った事件とはいえ、ライク処刑は言い訳できない汚点だった。ライクとナジの処刑はカーダールが直接に関与した政治的殺人であり、カーダールが死の直前に妄想に襲われた怨念の正体である。カーダールは自らその真相を語ることなく、墓場まで真実と怨念を引きずっていった。

ビェルキンの登場

フィールド、スーニィ、ライクの調書はロシア語に翻訳され、ビェルキンに届けられた。矛盾に満ちた「自白」調書を読み、ソ連側は不安を覚えたようだ。7月初めに、ビェルキンが直々にÁVHを訪れ、拷問による自白強要手法を厳しく批判した。もっとも、最後の手段として、暴力は許されると付け加えることも忘れなかったようだが。

こうして自白の一貫性を得るために、彼とその部下がÁVHの指導者とペアになって、再尋問を行うことになった。一部はアンドラーシ通りの本部で行われたが、主要な尋問はエトヴォシュ通りの秘密の館で行われた。この尋問におけるロシア側のやり取りは筆記も録音もされず、記録に残されなかった。

ビェルキンがブダペスト滞在中は、週に2～3度、ラーコシの許に足を運んでいたとされる。ラーコシはスターリンとのホットラインで結ばれており、スターリンの意向を確認しながら、ビェルキンと詳細を打ち合わせていたと考えられる。

ビェルキンはこうやって、チェコやポーランド、あるいはブルガリアやルーマニアの粛正人事にかかわっていた。こうしたロシア側の直接関与の証拠が残らないように、尋問記録は残されなかったのだ。

ライクが狙われた理由

何故、ライクがスターリン主義の「生け贄」にならなければならなかったのか。ライクが党内に敵を持っていたことは事実だった。

1946年3月に内務大臣に就任した折、ライクはピーテル・ガーボル率いるÁVOを内務省管轄下におき、自らの手で掌握しようとしてÁVOの指導者たちと軋轢を生んだ。個人的にもライクは粗野なピーテル・ガーボルを好まず、その更迭を考えていた。しかし、ラーコシの盟友を更迭する訳にいかず、指導者以下のメンバーの交代を行うことしかできなかった。ÁVO幹部とライクの関係が好転することなく、1948年8月にライクが外相に転じて、カーダールが内相に就任した時には、ÁVO幹部たちは祝杯を挙げたと言われる。なかでも、ピーテル・ガーボルの直属の部下でÁVH副長官のスーチ・エルヌー（モスクワ亡命組）は、マニアックに西側亡命組や国内残留組の戦中履歴を洗っていた。終戦直前、スペイン内戦での義勇軍から戻ったライクは矢十字党に捕らえられるが、矢十字党幹部だった実兄ライク・エンドレの介入で解放された経緯があり、「モスクワ亡命組」が疑念を挟む口実はあった。

党指導部の序列から見ると、モスクワ帰りのユダヤ人の「４人組」は政治局でも別格であり、重要事項はすべて彼らの先決事項であった。「４人組」の役割も明確であり、トップにラーコシがいて、その両脇に経済担当のゲルー、イデオロギー担当のレーヴァイが控え、もう1人のファルカシュはラーコシの手足として、内政・党内問題に専念していた。これら脇役のうち、ポスト・ラーコシの一番手は内政担当のファルカシュで、彼の最大の強敵がライクであった。

同じことはカーダールについても言える。ライクとカーダールはともに国内残留組であるが、人望や外見からライクが常に一歩リードしていた。決定的な場面になって、カーダールがライク粛正に傾いたと考えるのが自然である。

ラーコシはどうか。ラーコシは一時期、後継者としてライクを考えていたこともあると言われる。しかし、冷戦勃発によるラーコシ独裁が強まるにつれ、逆にライクはラーコシにとって危険人物になっていった。ライクは演説がうまく、背が低く太っているラーコシとは違い、長身で端正なマスクの美男子だった。ラーコシは常々、「長身の痩せた人物には悪者が多いというのが、古来から伝承された知恵だ」と私見を披露していた。ユーゴ問題でも、ライクはラーコシと意見の相違があったと言われる。スターリンの愛弟子として恭順の意を表すためにも、大物を差し出す必要があった。

政治局員にはライク以外に摘発する価値ある大物はいなかった。それぞれの思惑が一致して、フィールド逮捕から一挙に「ライク粛正」へ突き進んだと考えられる。

ライク裁判

いったんライク粛正を決めてから、ラーコシがすべての手順を指示するようになった。ライク裁判が始まる1949年8月末（あるいは9月初め）、ラーコシはライク告訴文書（ロシア語翻訳）を携えて、スターリンを訪問し、最終的な了解を求めた。この数日前に、ファルカシュ・ヴラジミールはこのロシア語文書をルーマニアのソ連大使館経由で、手渡しする仕事を与えられた。嵐で運行を見合わせていたMALÉV定期便を党の指示で無理やり飛ばせ、ソ連共産党中央委員でスターリンの秘書官であるポスクレビシェフ宛の文書がブカレスト空港で手渡しされた。

ライク裁判が始まる前、ラーコシは自らの執務室に2本の直通電話を引かせた。1本はビェルキンとピーテル・ガーボルへの回線であり、もう1本は検事・裁判長への回線である。裁判の様子は執務室で聴けるように準備され、ラーコシは直通回線を通して、逐一指示を出した。

この裁判が進行中、ファルカシュ・ヴラジミールはポーランドからラーコシ宛の緊急電報を受け取った。発信人はポーランド統一労働者党第一書記ビェルトである。「名代のルヴィンシュテイン（情報部員）を派遣したので、すぐに対応されたし」という内容だった。ラーコシの指示に従い、ピーテル・ガーボルとファルカシュ・ヴラジミールが空港で彼を出迎えることになった。後にピーテル・ガーボルが語ったところによれば、これはライク裁判とゴムルカ粛正

を繋げる必要性から派遣されたものだ。ラーコシがその内容を告訴状に含めることを忘れていて、これを急いで検察官に指示したが、当初のシナリオにない筋書きをどう入れるのか、担当検察官が困ったようだ。結局、ゴムルカとライクを結びつける道筋がつかず、この時点でゴムルカは逮捕を免れたのである。

ライク等の主犯の判決内容はラーコシが決めた。彼が判決内容を記した紙切れが裁判長に渡された。主要な人物の判決内容はラーコシが、それ以外の人物への判決内容はピーテル・ガーボル等のÁVH幹部が決め、ラーコシの承認を得るというのが、当時の手順であった。

死刑執行

ライク・ラースロー、スーニィ・ティボール、サライ・アンドラーシュの3名の絞首刑は、1949年10月15日に執行された。

ラーコシは裁判が終わった後、スターリンに死刑執行の許可を求めた。これにたいして、スターリンは即座に「死刑執行の必要はない」と回答電報を送ったことが確認されている。しかし、その数日後、第２電が到着し、死刑執行が容認されたという。確認されていないが、この二つの電報が往来した数日間に、ラーコシがスターリンに死刑執行の必要性を訴えたと考えるのが自然である。生かしておいてラーコシに有利になることは何もないからである。ナジ執行にたいする、カーダールの論理も同じものだっただろう。権力の普遍的な論理である。

死刑執行に際して、ÁVH幹部ならびに死刑囚の尋問に加わった取調官全員が、コンティ通り（現在のVIII.区トルナイ・ラヨシュ通り）にあったÁVHの監獄に招集された。ファルカシュ・ミハーイとカーダール・ヤーノシュも立ち会った。彼らは建物内の部屋から中庭に設置された絞首台を見ることになった。絞首台までスーチ・エルヌーが、死刑囚を誘導した。

死刑執行の後、スーチがÁVH幹部たちが待つ部屋に戻り、執行の状況を報告した。死刑執行を告げた時に、ライクとスーニィは何も望まなかったが、サライはコニャック１杯を所望しそれを煽った。執行に際して、ライクは共産党とソ連を讃えたが、スーチは何も語らなかった。しかし、サライは「俺たちを騙しやがって！」と叫んだという。

スーチの報告が終わり、集まったÁVH幹部等は簡単な飲み物とサンドウィッチでそれまでの労を互いにねぎらった。さらに、夕方にはピーテル・ガーボル主催のドナウ・クルージングがあり、ビェルキンを主賓としたソ連内務省の代表者、ÁVH幹部、取調官が参加した。ビェルキンはとくに機嫌が良かったようだ。

「祭り」の後

ライク処刑の翌月、ジュラテトゥーにて、フォルムコミンフォルムの会議が開かれた。ユーゴスラビア問題が最大のテーマで、この主報告をおこなったのは、ルーマニアのゲオロギウ・デジで、「ユーゴスラビアの殺人者とスパイの権力」と題するものだった。また、イタリア共産党トリアッティは国際労働者運動のイデオロギー的、政治的、組織的な統一性の重要性を強調する報告を行った。ハンガリーの代表団は、ラーコシ、ゲルー、レーヴァイ、カーダールで構成された。

12月にはブダペストでも、スターリン生誕70年の祝賀会がオペラハウスで盛大に挙行された。この忌まわしい1949年が終わろうとする暮れに、閣僚会議布告が発せられ、1950年１月１日より、ÁVH（国家保安局）は内務省の管轄から離れ、独立した組織として機能することが、法的に裏付けられた。ÁVH本部のあるアンドラーシ通りは、スターリン通りに改名された。

ライク事件は処刑で終わらなかった。それはスターリン主義権力の狂気の始まりに過ぎなかった。国家や党を超えた独立権力となったÁVHは、その後の2年間に、多くの人々を拘束し虐殺することになった。「貧すれば鈍する」。やがて、ÁVH幹部相互も疑心暗鬼になり、ハンガリーは狂気と化した権力の断末魔を見るのである。

ライク事件からスランスキー事件へ

ライク・ラースロー処刑はソ連が中・東欧の衛星国支配を本格化させる最初の事件であった。戦後冷戦の勃発とユーゴスラビアのソ連圏からの離脱は、スターリンに衛星諸国の徹底支配を決断させた。そのために用いられた手段が、1930年代半ばのモスクワ裁判を契機にスターリンが反対派を次々に粛清し、独裁権力を樹立する過程で使った「内部の敵」告発の恐怖政治であった。ソ連共産党の意のままになる人物を操り、権力の中枢にある政治家や政府高官を粛清の恐怖に陥れることで、ソ連への従属とスターリン型独裁権力樹立を衛星国に強要した。

ノエル・フィールド拉致事件、ライク・スパイ事件のでっち上げを通して、ハンガリーの治安・秘密警察内にソ連の顧問団が張り付くようになった。これを先例として、他の中・東欧各国の秘密警察内部にも逐次、ソ連顧問団が入り込み、当該国の政府や共産党を超えた権力として当該国の粛清を指揮することになった。それがライク事件以後に各国で連続的に起きた共産党・政府幹部の粛清事件の背景である。

スランスキー事件

ライク処刑に続き、1949年12月にはブルガリアの副首相コストフが、やはり同じく「アメリカのスパイ、ユーゴスラビアの手先」として処刑された。このソフィア裁判はライク事件ほどに注目されなかったが、それから少し時間をおいた1951年初頭から翌年末にかけて、チェコスロヴァキアでは共産党書記長スランスキーを標的にした粛清事件がフレームアップされた。これが国際的な注目を集めたスランスキー裁判（1952年11月）である。

被告となった14名の共産党幹部・政府高官のうち、11名に死刑、3名に終身刑が言い渡された。終身刑を受けたアルトゥール・ロンドンは釈放後に、自らの体験を綴った長文の手記（邦訳『自白』サイマル出版会、1972年）を発表し、フランスではそれにもとづく映画（日本上映タイトル「告白」1969年）も制作された。この手記と映画はロンドンの実体験を綴ったもので、スランスキー事件の全容を解明するものではないが、粛清事件で逮捕された被告たちが受けた処遇を詳しく描いている。ゲシュタポに勝るとも劣らない残酷な拷問と虐待を受け「自白」が強制されたのである。これこそソ連顧問団が指揮したスターリンの粛清手法であった。

イヴ・モンタン主演になる映画「告白」は、当時、外務次官だったロンドンが理由を明示されずに拉致・逮捕され、独房の中でも両手に手錠をはめられたまま、十分な睡眠も与えられずに拘置され、医療監獄に移されるまでの8ヶ月にわたって自白を拒否し続け、しかし最後にはソ連顧問団の筋書き通りの「自白」調書に署名し裁判での証言文章を暗記させられるおよそ21ヶ月にわたる長期の監禁生活を描いたものだ。映画に描かれた虐待の状況は、ロンドンの手記で記された通りのものが再現されている。

この事件の最終標的はスランスキーであり、その筋書きを成立させるために、スランスキーと仕事の上で関係があった政府高官を次々と拘束し、スランスキー逮捕のシナリオが秘密裏に準備された。1951年初頭から春にかけて、ロンドンを初めとする政府高官が逮捕・監禁されたが、そのほとんどはユダヤ系でスペイン内戦に参加した筋金入りの共産党員であった。あからさまに反ユダヤ主義が打ち出され、スペイン内戦に参戦した者はソ連の指導に従わなかったトロツキー主義者であり、ノエル・フィールドやダレスと関係があった者はアメリカ帝国主義の手先であり、ナチの強制収容所から生きて戻ってきた者はゲシュタポの手先であり、フランス

やイギリスの収容所から戻ってきた者は、それぞれの国の諜報員だと断定された。

フランスを中心に活動し、スペイン内戦にも参加した経歴のあるロンドンは、肺疾患の治療のためにフィールドの助けを借りたことがありそれでトロツキー主義者でアメリカ帝国主義のスパイという役割を与えられた。フィールドがハンガリーの取り調べで作成した中・東欧の知人リストが、明々白々の証拠にされた。

しかし、ロンドンの手記にあるように、逮捕・拘束された者のほとんどは、第二次大戦下でナチと闘い、スペイン内戦に参加した純粋な社会主義者・共産主義者であった。彼らの英雄的な経歴も知らない若い取調官に拷問を受けながら「自白」調書をとられ、自らの「有罪」を告白しなければならなかったのである。ロンドンを除き、すべての逮捕者が「自白」したところで、スパイ事件の首謀者としてスランスキーが逮捕された（1951年9月）。それから1年かけたシナリオの完成を待って公開裁判が開かれ、死刑判決が下されるという、実に手の込んだ大がかりな事件であった。

チェコスロヴァキアの特殊性

中・東欧諸国における粛清事件は、当該国の権力を超えた存在（ソ連共産党の諜報機関）が仕組んだもので、当該国のソ連追随者を使い、当該国の指導的人物に狙いを定め処刑し、衛星国にソ連への従属を強いたものである。こうした粛清事件にかかわった者は、スターリンの死（1953年3月）やフルシチョフの「秘密報告」（1956年2月）を契機に告発・逮捕され、逆にそれまで逮捕・監禁された者は釈放され復権されるというプロセスを踏んだ。ハンガリーではこのような復権運動が動乱へと発展していったのだが、チェコスロヴァキアでは、ロンドンなどの終身刑を受けた者の釈放が遅れただけでなく処刑されたスランスキー等の復権は拒否された。

ハンガリーやポーランドに比べ、粛清事件のフレームアップに遅れをとったチェコスロヴァキアにたいして、ソ連側が完全な主導権を握って粛清を展開したためである。スターリンの威光で幹部に抜擢された者たちが共産党幹部に居座ったために、「秘密報告」以後もチェコスロヴァキア共産党の自浄作用が働かず、1968年の「プラハの春」を迎えるまで、スランスキー事件の犠牲者の復権は実現されなかった。

「プラハの春」弾圧以後、チェコスヴァキアでは保守勢力が権力を奪還し、1989年の体制転換に至るまで、ソ連保守派と密接に結びついた共産党指導部が権力を維持した。体制転換で新たに成立した民主主義権力は、チェコスロヴァキ共産党員の公職追放を行ったことには、このような歴史的事情がある。動乱を契機に、カーダールの緩やかな独裁政治でソ連と一線を画していたハンガリーと違うところである。

粛清の連鎖

ライク事件、コストフ事件、スランスキー事件は、スターリンが共産党内の政敵を粛清したモスクワ裁判や反対派の弾圧の経験を、中・東欧諸国に拡大したものである。

ロシア革命前夜、ロシアには共産党の秘密武装組織があり、革命成功とともにこの組織はＧＰＵ（国家政治組織）と名付けられた公的組織になった。これが1934年にNKVD（内務人民委員部）と呼ばれる諜報組織の統合機関に吸収され、長官についたヤコーダのもとで、スターリンに反対する政敵の大規模な粛清が始まった。しかし、ヤコーダは4年で解任されて部下とともに処刑され、次いでエジェフが長官に就き、新たな粛清を始めたが、彼も2年で解任・処刑された。その後にこの役を担ったのがベリヤである。このベリヤがスターリンの意向を担って、中・東欧の粛清を指揮したのである。

1930年代のソ連では、粛清を実行した者がその行き過ぎを理由に粛清され、その後任者が再び粛清の実行者になり、再びスターリンの粛清対象になるという連鎖が続いてきた。ライク処刑の後、ハンガリーでもこの粛清の連鎖が始まったのである。

社会民主党出身者の粛清

ライク・ラースロー処刑でスターリンのさらなる信頼を得たラーコシは、ハンガリーにソ連と同じ個人独裁型支配体制を構築する道を選んだ。1950年初頭からスターリンの死去（1953年）にいたるまで、ハンガリーではラーコシ独裁を確立する内部粛清の嵐が吹き荒れることになった。その背景には冷戦体制突入の危機感から、東欧圏のソ連への同化による社会主義体制の維持・強化という歴史的な力が働いていた。

歴史的背景

米ソ冷戦激化の最中にユーゴスラビアがソ連圏から離脱したことは、社会主義への許し難い裏切りであり、中・東欧諸国がユーゴスラビアの二の舞になることだけは絶対に避けなければならなかった。そのために、ユーゴスラビアにたいするイデオロギー的批判攻勢が強められ、東欧圏における親ユーゴスラビア勢力を徹底排除することが求められた。ライク処刑直後にハンガリー（ジュラテトゥー）で開催されたコミンフォルムの大会は、ユーゴスラビア批判を国際戦線にまで高めるものだった。まさにライク処刑はユーゴスラビアの同調者にたいする最初の見せしめ事件であった。ソ連圏内部の統制を維持するために、存在しない事件をでっち上げてでも、イデオロギー的な統一を図ることが必要だったのである。それを実行したラーコシはスターリンとソ連共産党の保守派指導者からさらに厚い信頼を得ることになった。

1950年6月の朝鮮戦争開戦に至るまで、ソ連指導部は対ユーゴスラビア侵攻を一つのシナリオとして描いていたと思われる。このシナリオが実行されれば、ユーゴスラビアと国境を接するハンガリーとブルガリアは、ソ連・東欧軍侵攻の矢面に立たなくてはならない。ユーゴスラビアへの親近感が強いハンガリーがユーゴスラビアへの侵攻を躊躇することがあってはならない。そのために、「ユーゴスラビア修正主義者に犯されたアメリカ帝国主義のスパイ」というレッテル貼りは、単純なイデオロギー闘争には不可欠のスローガンだった。ただ、朝鮮戦争における米軍の素早い反撃を目の当たりにして、ユーゴスラビア侵攻のシナリオは後景に退いた。

それに代わって、「共産党内部に潜むユーゴスラビア修正主義、アメリカのスパイ摘発」という内向きの闘いが、ソ連共産党とラーコシ一派の主要な「闘争目標」になった。ハンガリーでそのイデオロギー闘争の標的になったのは社会民主党出身の大物政治家であり、チェコではスランスキー共産党書記長であった。

ハンガリーの事情

第二次大戦中のハンガリーでは非合法のハンガリー共産党の影響力は小さく、それにたいして合法政党であった社会民主党は大衆的な影響力を維持していた。このため、戦後の政治体制確立過程において、ソ連に後押しされているとはいえ、共産党は社会民主党とその政治家を無視するわけにはいかなかった。

1948年6月、共産党と社会民主党が合同してハンガリー勤労者党が誕生したが、その政治局員14名のうち、5名が社会民主党、9名が共産党の出身者で占められた。なかでも社会民主党出身のサカシッチ・アルパードは、ハンガリーの対外的な顔となる最高幹部会議長に選ばれた。同じく政治局員に選出された社会民主党出身のマロシャン・ジョルジュは、共産党との合同に乗り気でなかったサカシッチと異なり、社共合同に積極的で、軽工業大臣のポストに就いた。さらに、政治局員ではないが、やはり社会民主党出身の中央指導委員のりリース・イシュトヴァーンは法務大臣のポストに就いた。これら社会

民主党出身の重鎮たちが、ラーコシによる粛清の標的になったのである。

サカシッチ逮捕

1950年4月24日、12区のローラント通りにあるラーコシの私邸に、4人組に加えて、カーダール、サカシッチ、ピーテル・ガーボルが招集された。ラーコシの指示によって前日にラーコシ邸に盗聴マイクを敷設したファルカシュ・ヴラジミールがこの集まりを詳しく証言している（Farkas Vadimir, Nincs mentség, Budapest, 1990）。この会合で、ラーコシはサカシッチが1930年代の建設労働組合の幹部時代に、警察と接触したことを理由に「ホルティ政権の政治警察のスパイ」だと決めつけたのである。ラーコシは自ら口述し、サカシッチに二つの文書を自筆で作成させた。一つは「政治警察のスパイであった」という自白書であり、もう一つは「最高幹部会議議長を辞める」という辞表である。

ラーコシ夫妻はサカシッチの娘であるクラーラとは家族付き合いしていたが、サカシッチ夫妻の軟禁から逮捕・監禁に伴い、クラーラの夫で社会民主党出身の中央委員であったシッファー・パールも逮捕した。サカシッチは丁重に扱われたが、夫人は獄死した。他方、シッファーには拷問が加えられた。

印刷工出身の社会民主党員で、後にカーダール政権の経済改革を主導したニェルシュ・レジューは、サカシッチ逮捕の際にラーコシが手にしていた政治警察との関係を示す書類は偽造されたものと証言している。

一斉検挙

サカシッチ逮捕から小物の逮捕が続いたが、7月から8月にかけて、社会民主党出身の大物政治家が一斉に逮捕・監禁された。軽工業大臣マロシャン・ジョルジュ、法務大臣リース・イシュトヴァーン、中央委員で経済学者のヴァイダ・イムレが逮捕され、ÁHVの若い取調官がこれらの政治家の聴取に当てられた。センディ・ジョルジュはマロシャンとシッファーを担当し、リースを担当したのはバウエル・ミクローシュである。センディはバウエル・タマーシュの叔父にあたり、ミクローシュは父にあたる。バウエル・タマーシュの母もまた当時、ÁHV職員として働いていた。彼等はÁHVでも一目置かれる有能な職員であった。まさに、バウエルの家族は、ÁHV一家でもあった。

センディもバウエルも知的でかつ洗練された青年だという評判はあったが、センディは非常に攻撃的な性格の持ち主で、ラーコシの指示もあって容疑を否定するシッファーに容赦ない拷問を加えたと言われている。バウエルはセンディほどに攻撃的ではなかったが、リース法務大臣の取り調べにあたって、天井に吊したバケツからリースの頭部に水を垂れ流し続けるという拷問手法をとった。当時、彼の上司であったファルカシュ・ヴラジミールがこれを問いつめたところ、「古代中国から使われている有効な手法」だと自らの博識を披露したという。ファルカシュはバウエルの妻ユーディットにもこのことを伝え、このような拷問を止めるように二人でバウエルを説得したと記している。

ところが、56年動乱以後にファルカシュ・ヴラジミールがÁHV時代の罪を問われた際に、バウエルの妻は当時の状況を全面的に否定し、夫の無実を主張した。以後、バウエル家ではÁHV時代の犯罪はなかったものになり、息子バウエル・タマーシュもまた、父は取調官であったことはないとまで国会で主張している。

マロシャン・ジョルジュ等たちはこの年の暮れに死刑判決を受け、すぐに終身刑に減刑されたが、1956年3月まで監獄生活を続けた。マロシャンはその後カーダールの側近として、1962年にラーコシ時代の調査をとりまとめた中央委員会において、「爪はがしのバウエル」という表現でバウエル等の若い取調官たちを批判した。

リース・イシュトヴァーンは1950年9月15日の取り調べにおいて頭部を強打され、そのまま息を引き取った。誰が死に至る拷問を加えたのかは、明らかにされていない。

ÁVH（国家保安庁）粛清の始まり

ユダヤ人虐殺の犯罪人を追っているサイモン・ヴィーゼンタール・センターが、「ラストミニュッツ」のアクションとして、オーストラリア在住のゼンタイ・カーロイ86歳を告発し、ハンガリー政府に引き渡し交渉を要求した。ハンガリー政府はこの要請にしたがい、オーストラリア政府と外交交渉を重ね、この夏、オーストラリアの裁判所はハンガリーへの引き渡しを認める判決を下した。実際に引き渡しが行われるかどうかは、さらに上級審の判断を待たなくてはならないが、一つの判断は下された。

告発状によれば、ゼンタイはハンガリーのファシスト党である矢十字党の党員として、1944年11月、ユダヤ人を識別する星十字を胸に付けていなかった18歳のバラージュ・ピーテルに暴行を加え、縛ったままでドナウ河に投げ捨てた殺人容疑がかけられている。すでに60年以上も経過した事件である。

ハンガリーではソ連軍による解放で終戦を迎えるまでのわずか１年の間に、多くのユダヤ人が強制収容所送りになるか、虐殺された。戦後、ハンガリーにおけるファシズム運動を主導した矢十字党の党員たちは犯罪追求を恐れて、大挙して国外へ逃れた。ゼンタイもその1人だと考えられている。

しかし、戦後の共産党政治警察による合法的な殺人や非合法的な虐殺の責任が追及されず、矢十字党の責任だけが永遠に追求されるのは、片手落ちのように思われる。ユダヤ人への犯罪だけは永遠に免責されないというのは、奇妙な論理と言わざるをえない。

ユダヤ人と共産党

戦後の中・東欧の共産党にはユダヤ人青年が大量に加入した。ユダヤ人虐殺の恐怖と仕返しの意図から、権力者として自らの存在を主張しようとして、多くのユダヤ人の若者が共産党に加わった。ハンガリーでも共産党の指導部だけでなく、秘密警察であるÁVHにも多くのユダヤ人の若者が加わった。なかでも、バウエル・ミクローシュとシェーンボルグ・ユーディット夫妻（バウエル・タマーシュの両親）、ユーディットの兄であるセンディ・ジョルジュは、有能な取調官として、ÁVHでも一目置かれる存在だった。

バウエル・ミクローシュとセンディ・ジョルジュはその語学の才能を買われ、東欧共産党の粛清劇の始まりとなったノエル・フィールドの尋問に加わり、さらにライク・ラースローの取り調べにも加わった。さらに、社会民主党幹部の粛清においても、センディ・ジョルジュはサカシッチ最高幹部会議議長の、バウエル・ミクローシュはリース・イシュトヴァーン法務大臣の担当取調官に抜擢された。まさに、バウエル一家は中・東欧共産党粛清の重要事件すべてにかかわっている。

リース・イシュトヴァーンが取り調べにおいて急死したことは前号で記した。この虐殺にかんして、2000年前後の国会で野党の小地主党などが調査を要求し、SZDSZ議員バウエル・タマーシュが反論する一幕があり、いわゆる政治警察の過去をもつ父と息子の関係が、ハンガリーの政治家や芸術家の間で一つのテーマになった。

リース法務大臣の拷問殺人の後、ÁVHでは信じがたい事件が仕組まれていく。それはソ連におけるスターリンによる粛清劇のハンガリー版そのものであった。

スーチ兄弟の逮捕

サカシッチ逮捕、リース法務大臣急死から間もない10月、保安警察副長官スーチ・エルヌーとその弟スーチ・ミクローシュが逮捕された。

それまでスパイを摘発する側であったÁVH副長官が、「トロツキー主義者であり、アメリカのスパイである」と決めつけられ、逮捕されたのである。この逮捕を主導したのは、ソ連の顧問団とラーコシである。

言うまでもなく、スーチ・エルヌーはÁVH長官ピーテル・ガーボルの片腕として、ノエル・フィールドにかかわるグループの摘発の先頭に立ち、その後のライク逮捕に始まるスパイ摘発の陣頭指揮をとってきた男である。そのスーチが、今度は逆に「アメリカのスパイ」と決めつけられた。

スーチはマニアックに政治的指導者の過去の経歴を洗っていたことで知られていた。その調査はラーコシやレーヴァイにまで及んでいたと言われる。いわばすべてを知る男であった。夫人はロシア人で、ソ連の支援を受ける立場にあった。そのような強力な地位を持つ男が、今度は「スパイ」摘発の罠に嵌った。

ただ、彼には一つだけ弱点があった。それは弟のミクローシュが大戦中に英国に亡命し、英国の諜報機関のエイジェントになっていたことだ。その事実だけを口実に、スーチ兄弟は保安警察内に勢力を広げ、西側スパイ網を作り上げたというシナリオが描かれた。

スーチ兄弟の逮捕によって、ÁVH内は凍り付いたと言われる。もちろん、スーチに近い職員も逮捕された。副長官やその周辺の人物が逮捕されるなら、ÁVHの職員の誰もがその対象になる可能性があるからである。スーチ逮捕によって、ハンガリーの政治警察は大きな転機を迎えることになった。

スーチ兄弟虐殺

逮捕されたスーチ兄弟の尋問は進まなかった。取調官に犯罪追求の自信も証拠もなかっただけでなく、誰もが容疑を信じられなかったからである。他方、スーチ兄弟も自信満々に受け答えし、容疑を裏付けることができなかった。それを知ったラーコシは、ピーテル・ガーボルにたいして、スーチの自己批判書をとるように指示した。

スーチはこの要請に応じて、詳細な報告を書いた。その内容は公開されていないが、それまでのラーコシと政治警察が仕組んだ奸計の一部始終が記されていたようだ。ラーコシはこの報告を受け取った後、ピーテル・ガーボルに拷問の指示を出したのである。

拷問を実行したのはÁVH内の拷問担当プリンツ・ジュラとそのグループである。スーチは屈強な体躯の持ち主であったが、兄弟揃って拷問が加えられた。皮の棍棒とタバコの火を使った拷問だと言われている。拷問が始まって1時間もしないうちに、プリンツが慌てて長官室に来てスーチ兄弟に異変があることを伝えた。事務所に残っていた医師が注射しただけで、問題ないという判断だったという。しかし、それから30分もしないうちに、スーチ兄弟の心臓は完全に止まってしまった。

スーチ兄弟死亡のニュースはすぐにラーコシとソ連顧問団に伝えられた。ラーコシは少し苛ついた様子だったが、それ以後はスーチ兄弟の件に触れることがなかったという。ソ連顧問団もあたかも何もなかったかのように、スーチ兄弟の死亡はそのまま不問のまま片付けられた。

スーチ虐殺の謎

何故、スーチ兄弟が死ななければならなかったのか。誰がその指示を出したのか。ラーコシとソ連顧問団の意思だとすれば、いかなる目的のためだろうか。

一つは、まさに秘密を知り尽くした者を粛清するというスターリンの手法が、ソ連顧問団から受け継がれたことであある。

二つは、ピーテル・ガーボルでなく、ソ連の支援があるはずのスーチが標的になったのは、ソ連共産党内の政治的対立がハンガリーの顧問団の判断に影響を与えたためであろう。

スーチ兄弟虐殺の後、共産党トップと政治警察指導者の連続的な逮捕劇が始まった。

保安庁官ピーテル・ガーボル逮捕

動乱分析の意味

ヒトラーやナチを題材にした映画は今も頻繁に制作・上映されている。現在、日本で上映中のトム・クルーズ主演「ワルキューレ」は、ベルリン陥落に先立つおよそ 1 年前に仕組まれたヒットラー暗殺計画をテーマにしたものだ。昨年封切された「わが教え子、ヒトラー」は追い詰められたヒトラーに演説の教師役を務めたユダヤ人教授の物語。さらには、奇才ソクーロフの 4 部作の 2 作目「モレク神－ヒトラーの日々」は、ザルツブルグ山岳地帯にあるヒトラーの別荘での日常を描いたもの。

このように、ヒトラーとナチスドイツは、今もなお映画の題材として魅力を失っていない。人類史上、最大の虐殺を遂行した人物やその取り巻き、ナチズムの犠牲者やヒトラー暗殺計画は、汲みつくせないほどの問題性や謎を孕んでいるからだ。同じことは、同時代のソ連の独裁者スターリンについても言える。しかし、スターリンにかんする映画はきわめて少ない。20 世紀のロシアがスターリンの個人支配に嵌ってしまったが、史上稀にみる恐怖独裁体制を樹立したその中心人物を描く映像がないのは不思議である。北朝鮮の体制もまたスターリン的独裁のなれの果てであり、まさに博物館的な価値をもっている。独裁下の人々には悲劇的な体制だが、時代に遅れた体制は喜劇的ですらある。その意味でも、スターリン体制解明は現代においても適時性を失っていない。スターリンにたいするさまざまな暗殺計画が存在したはずだし、それを感知した独裁者が狂気の沙汰とも言える処刑や殺人を指示していたことは、ヒトラーと同様に、汲みつくせぬほどの謎に包まれている。その解明や推理は十分に映画の題材になるはずだが、何故かほとんど手が付けられていない。

スターリン主義体制解明の最大の障害はロシアそのものだろう。共産党独裁体制が解体されたとはいえ、現在のロシアはスターリン体制を支えた旧保安（秘密）警察（出身グループ）が権力を握っている。ロシアでは形を変えた独裁権力が維持されている。明らかに、ロシアはスターリン主義（体制）と本質的に決別していない。したがって、旧共産党時代、とくにスターリン主義時代の保安警察の大量殺人やスターリンの指示系統について、解明を阻む障害が陰に陽に存在する。スターリン時代の映像化にはそれなりの事実関係の解明が前提されるが、それができないところに、スターリンとその時代の映画化が難しい最大の要因があると考えるべきだろう。

もっとも、同じことは日本でも見られる。天皇制国家における侵略犯罪がほとんど解明されず、歴史の中に葬られ、その映画化すら難しいのは、ロシアと同じ理由があるからだろう。日本社会は天皇制国家による全体主義体制を自らの意思で否定してこなかった。だ

から、今でも何の疑問を抱くことなく、政府の号令でマスクを一斉に着用したり、一斉に取り外したりする。外から見ていて気色悪い。インフルエンザにかかって会社に迷惑をかけたら会社にいられなくなるとか、学校が休校になれば学校に謝らなければならないと意識はいったい何だろうか。日本にはそれをおかしいと感じさせない社会力が働いている。北朝鮮は特別な存在だが、しかしアジアの諸国は多かれ少なかれ、20 世紀の全体主義から抜け出してはいない。北朝鮮はけっして日本社会の対極に位置する国家ではない。日本を含めアジアの諸国はそれを他山の石とすべきだろう。他人事ではないのだ。

ハンガリーについても同じことが言える。戦後のハンガリー共産党、とくにラーコシ書記長の独裁的支配下における保安警察の殺人事件やその下手人たちについて語ることは、ハンガリーでは歓迎されない。多くの政治家の直系の肉親が何らかの形で共産党独裁の暴力的な支配にかかわってきたからである。臭いものに蓋をするのはどの国でも同じ。そう考えると、ドイツ人の手によるナチスとヒトラー断罪は、非常に稀な事例だと言える。しかし、人類がもっと賢くなり、過去の過ちを繰り返さないためにも、歴史的な犯罪を解明し検証することが不可欠なのだ。

本誌における「ハンガリー動乱へ至る歴史」を探ることは、ハンガリーにおけるスターリン主義体制の確立と崩壊を分析することでもある。本家のロシアで解明が難しいのであれば、その衛星国におけるスターリン主義の影響を解明することでしか、歴史を紐解くことができないのである。

ブダペスト 12 区

ハンガリー共産党の戦後史において、ブダペスト 12 区は重要な位置を占めている。なによりも、数々の事件の舞台になったラーコシの邸宅がローラン通りにあった。サカシッチ最高幹部会議長が逮捕されたのはこのラーコシ宅で、その地下室に監禁された。中欧の共産党幹部粛清劇の始まりとなったのは、本誌の連載でも詳しく記述したように、アメリカ人コミュニストのノエル・フィールドの拉致・監禁であるが、その拷問が実行されたのは、ローラント通りからイシュテンヘジ通りを上った後に連なるエトヴォシュ通りにある保安警察の秘密の館である。また、日本人学校があるヴィラニョシュ通りの保安警察の秘密の館には、ソ連の保安警察のアドヴァイザーたちが常駐していた。

現在の政府迎賓館は 12 区のベーラ・キラーイ通りにある。通りからは何も見えないが、中には広大な敷地にホテルのような宿泊施設が建っている。1952 年初め、この場所に豪華な館が 4 棟建設された。共産党幹部のヴァシュ・ゾルターンの着想で、ゲルー・エルヌー、ファルカシュ・ミハーイ、レーヴァイ・ヨージェフの最高幹部とヴァシュ自身が居住する館として建設されたものだ。ラーコシがこの館に入らなかったのは、やがて再建される王宮に入る予定だったからだと言われている。

1952 年はラーコシの還暦年にあたり、スターリンの生誕 70 年をオペラハウスで盛大に祝ったのに倣い、自らを神格化するのに執心していた。ハンガリーの社会組織は皆、ラー

コシの誕生日に合わせてプレゼント合戦を行い、ラーコシ絶対化への道を歩み始めた。そうした事情もあって、1952 年を境として、共産党の最高幹部の中でも、ファルカシュ・ミハーイとの関係が悪化するようになった。ファルカシュは次第にラーコシと距離をとるようになり、夏の国会における首相就任式にも出席しないという関係にまで陥ってしまった。ラーコシよりはファルカシュの方が、ソ連共産党との繋がりが強く、ソ連共産党の後押しがある。だから、ラーコシに対抗しても簡単には失脚しないという自信があったと思われる。実際、ラーコシはモスクワにおいて、スターリンとモロトフを前に、ファルカシュとの関係悪化を問いただされ、それを断固として否定せざるをえなかった。しかし、ハンガリー共産党内ではラーコシの組織掌握術に一日の長があり、ファルカシュは後塵を拝していた。この力関係が後の両者の関係の展開に大きく影響する。

ちょうどこの時期、チェコではスランスキー共産党書記長を狙い撃ちにした粛清劇が展開しており、ラーコシにとってもチェコの動向は気にかかるものだった。というのは、明らかにチェコ共産党幹部の粛清は、ユダヤ人幹部に狙いを定めたものであり、スターリンとその側近であるベリヤの意思であることは明瞭だったからである。ラーコシを含めたハンガリー共産党の最高幹部 4 名はみなユダヤ人である。だから、最高指導者であるラーコシには何としてもスターリンの歓心を買い、粛清の対象になることから逃れる必要があったと思われる。

ピーテル・ガーボル逮捕

1952 年暮れ、ソ連では内務大臣アバクモフが「アメリカのスパイ容疑」で逮捕され、同時に内務省幹部たちも逮捕・監禁された。その中に、中東欧の粛清劇を指揮してきたベルキンもいた。そこから、「ハンガリーのスパイの親分」として、保安警察長官のピーテル・ガーボルの名前が挙がった。これはスターリンの疑心暗鬼が側近の粛清に向かわせた最後の事件である。ベリヤはピーテル・ガーボル逮捕の指令をラーコシに発し、ラーコシはローラント通りの私邸にピーテルを招き、その場で逮捕したのである。

ノエル・フィールドの逮捕から始まり、外務大臣ライク・ラスローの逮捕・処刑、サカシッチの逮捕・処刑、リース法務大臣の虐殺、配下の部下スーチ兄弟の虐殺、カーダールの逮捕の一連の粛清劇を指揮してきたラーコシの片腕ピーテル・ガーボルが、粛清の対象になったのである。ピーテルの妻はラーコシの個人秘書でもあった。ピーテル逮捕と同時に、妻のシモン・ヨラーンも逮捕された。まさにスターリン主義の狂気がラーコシを通して、ハンガリーに伝播したのである。

ピーテル逮捕と同時に、保安警察の取調官もまた大量に逮捕・拘束された。その中には、ノエル・フィールド、ライク・ラスロー、リース・イシュトヴァーンの逮捕や処刑、虐殺に関係していたバウエル・ミクローシュやセンディ・ジョルジュが含まれていた。いずれも「CIA のスパイ」容疑で逮捕された。カーダールもまた、拘束されたまま獄中にあった。

スターリンの死まで後 3 か月。従順にスターリンとソ連共産党の指示に従ってきたラー

コシは、スターリンの死によって窮地に追い込まれるが、自らの責任をファルカシュに押し付けることによって、延命を図る。これにたいして、スターリン後のソ連共産党政治局もラーコシを見限ることなく、ラーコシの組織掌握手腕に期待し、ラーコシの筋書きにしたがってファルカシュに責任をとらせた。社会騒乱が統制不能になるまでラーコシや、ラーコシ追放以後は、同じくラーコシ一派のゲルーに頼ったことが、その後の社会的大混乱を帰結することになった。

第 4 部

ハンガリー動乱 50 年
ナジイ・イムレ処刑 50 年

カーダール評価の難しさ

首相府の諮問委員会である通称「ケネディ委員会」は、2005年9月400頁余の報告（首相府の　HP　からダウンロードできる）をまとめた。この委員会は、いわゆる旧体制時代の機密文書、政治保安警察の諜報文書取扱いにかかわる歴代政府の施策を検討し、問題点を明らかにして、機密文書の公開に向けた法律策定を促すことを目的としたものだ。

現在、ハンガリーの機密文書の多くは 70 年間の機密指定になっており、旧体制の保安警察関係資料も研究者以外に閲覧することができない。また、研究者もすべての文書を閲覧できる訳ではない。旧社会主義国の多くの国では、依然として旧体制時代の機密文書管理法が効力をもっており、著しく長期にわたって国民の眼から公文書を隔離しているのが特徴である。体制転換によって旧体制の過ちを直していくことが必要なのに、すべての重要文書が隠されていたのでは歴史の評価を下すことも、そこから教訓を得ることもできない。有効な法律が策定できない背景には、与野党それぞれが抱える内部事情がある。しかし、公正な歴史評価を行うためには、これらの機密文書が適切に公開されなければならない。

ハンガリーに固有な問題

本コラムで連載していように、ハンガリー動乱勃発に至るまで、ハンガリーの保安警察は合法・非合法な殺人を繰り返してきた。しかし、この動乱前の保安警察によるフレームアップが誰によって発案されどのように実行されたのかという指揮系統の全容や、その政治責任が完全に解明されていない。体制転換以後、歴史的評価に資する証言や書物は多く出版されているが、機密資料の重要な部分が 1956 年の動乱や 1989 年の体制転換の混乱に紛れて廃棄されたとも言われている。

ハンガリー動乱によって権力を獲得したカーダールは、その地位を固める過程で、ライク処刑事件以後、自らが関わってきた事件の資料や、1951 年に自らが逮捕され時に作成された自白書などの重要書類や証拠物を廃棄したと考えられる。ナジの処刑に拘ったのも、またラーコシをソ連から帰国させ処罰すべきという意見を無視して、ラーコシの帰還を許さなかったのも、ラーコシ時代の自らの役割が暴露され、権力維持を難しくするという政治判断からだったのだろう。

さらに、1989 年の体制転換においても、動乱以後の保安警察資料が廃棄されたと言われている。これは現社会党が平和的に政権を移行する過程で生じたことである。旧社会主義労働者党や新生社会党の一部の幹部たちは、秘密裏に旧体制時代における不都合な資料を秘密裏に廃棄したようだ。しかし、それでもなお、諜報部員のすべての資料を廃棄することは不可能で、研究者の長期にわたる分析から、現存の政治家や知識人・文化人で諜報部

員だった人物のコードネームが特定されている。

チェコスロバキアやポーランドのように、体制転換によって旧共産党にたいする厳しい眼が注がれた国とは異なり、旧体制の要人たちが体制転換以後も与党や野党の要人として公的舞台に活動しているというハンガリー的な現象が、旧体制の機密文書を公開させる法律策定を難しくさせている。さらに与野党を問わず、政治家の両親あるいは縁者に保安警察の関係した者がいたり、その指導的地位にあったりした者がいることも、真相究明を難しくしている。

カーダールをどう評価するか

ハンガリーの歴史協議会は「ハンガリー史における評価が分かれる人物」というシリーズで講演会を行い、それを昨年、1 冊の書物（Magyar történelem vitatott személységei, Kossuth kiadó, 2008）にまとめた。その書物の最後を占めているのが、カーダールである。「国を救った救世主か、それとも変動を生き抜いたしぶとい政治家か」という問いかけである。

通常、カーダールの統治は 1956 年から 1988 年の書記長退陣までの 32 年間とされるが、実際には戦後の共産党再建から幹部として党と政府の要職を占めてきたから、実に 40 年以上にわたって戦後ハンガリーの政治的指導者だったことになる。もっとも、ジュルチャーニィ首相夫人の祖父であるアプロー・アンタルのように、粛清対象にならなかったために、カーダール以上の長期にわたって共産党政治局員を務めた政治家もいるが、アプローは一度として政権のトップに加わったことはなく、常に政治局員の末席を汚してきた政治家だ。それにたいして、カーダールは共産党の幹部として、常に党と政府の要職に就き、戦後のラーコシ独裁期を支えながら、1951 年にはスパイ容疑で逮捕され、スターリンの死によって復権して党指導部に戻って再びラーコシ＝ゲルーと手を結び、その後のハンガリー動乱で党のトップに祭り上げられ、今度はそれを逆手に自らの権力を脅かす政治家を粛清し、その後に国民宥和の「柔らかい独裁体制」を敷くようになった人物である。

こういう経歴をもつ政治家を一言で評価することはできない。カーダールが肯定的に評価されるのは、動乱の処理が終わり、国民宥和を唱えた 1962 年以降の時期である。それ以前のカーダールは、ライク処刑とナジ処刑に直接手を下した人物として否定的な評価を受けよう。カーダールは 1951 年にスパイ容疑で逮捕されたことから、ラーコシ独裁の犠牲者として自らの描き、それまでの自らの汚れた役割を免罪したようだ。しかし、ラーコシに荷担してライクを処刑し、それ以後の共産党独裁（ラーコシ体制）確立に積極的に貢献しただけでなく、釈放以後にはラーコシ＝ゲルーに再び協力して、戦後のフレームアップの全責任をファルカシュに帰せ、ラーコシがソ連に亡命した後は、ゲルーと一緒になって動乱が始まるまで行動を共にしていた。この歴史的過去は消し去ることはできない。本コラムで詳しく分析したように、ナジ処刑もまた、カーダール自身が決断したものである。

カーダール逮捕の背景

戦後世界が冷戦体制に入り、朝鮮戦争が勃発するなか、スターリンのソ連とその衛星国では、ソ連共産党の強引な主導によって、衛星国の共産党政府の締め付け政策が実行されるようになった。まさにライク外相処刑は中・東欧におけるスターリンのソ連共産党が主導する粛清の号砲であった。

その第一弾として、政府や共産党に加わった旧社会民主党系の幹部が粛清の目標に設定された。あること、ないことを繋ぎ合わせて、粛清の理由がでっち上げられ、抹殺するという恐怖政治が始まった。ライク処刑や社会民主党幹部処刑において、カーダールは党政治局員および内務大臣として重要な役割を担った。とくにライク自白調書はカーダールによる尋問によって作成され、ライク自身も処刑までのあいだにラーコシ宛てた上申書において、「カーダールの説得に応じて自白したが、まったくの濡れ衣である」と記したと言われる（「ライク上申書」はすでに廃棄されている）。

それ続く第二弾は、保安警察内部の粛清である。それが前回に記したスーチ兄弟の虐殺である。共産党による粛清劇の初めから積極的に関与し、保安警察の裏の裏まで知るスーチを消すという決断は、スターリンあるいはそれを代弁するベリヤの指示にもとづいてラーコシが実行したとしか考えようがない。

1949 年秋のライク処刑から 1950 年末にかけて、社会民主党出身のサカシッチ最高幹部会議長の逮捕（1950 年 4 月）、リース法務大臣の虐殺（1950 年 9 月）、保安警察幹部のスーチ兄弟の虐殺（1950 年 10 月）が続いた。この粛清の連鎖のなかで、粛清の目標は次第に共産党内部に移っていった。スターリンやその側近からの催促なしでは考えられないことだが、ラーコシはスターリンの歓心を買うために、積極的に粛清路線を歩んだと考えられる。

戦後の共産党を再建したラーコシ、ゲルー、レーヴァイ、ファルカシュの４人組は皆ユダヤ人で、ソ連帰りであった。ゲルーは経済担当、レーヴァイは文化・イデオロギー担当、ファルカシュは内務担当で、粛清関連の指令はラーコシからファルカシュ、あるいはラーコシからラーコシの盟友で保安警察長官ピーテル・ガーボルのラインで実行に移された。レーヴァイはラーコシと度々激しく議論する様子が伝えられており、ラーコシの側近たちはレーヴァイが粛清の標的になるのではないかと考えたようだが、この４人組は粛清対象外であった。４人組に続く共産党幹部はソ連亡命歴のない国内派のカーダールであった。スターリンの指示にもとづき、ラーコシは「共産党内部の敵」として、カーダールを祭り上げる意志を固めた。

隣国チェコスロバキアでは、やはりソ連共産党の指示のもと、スランスキー共産党書記長を標的にした粛清劇が始まろうとしていた。1951 年の年明けから、ハンガリーとチェコスロバキアでは、共産党の最高幹部を標的にした粛清事件が着々と準備されていた。

カーダールの弱み

スランスキー事件やサカシッチ事件でも粛清の名目は、戦前の非合法活動における「共産党への裏切り」である。戦前のファシズム政権との闘いにおいて、さまざまな政治的潮流や権力との関係で非常に錯綜した状況が生まれていたことは、容易に想像できる。スペイン内戦に加わりながらソ連共産党の指示に従わなかった者、国内の政治警察の取り調べを受けて、簡単に釈放された者などの履歴が洗われ、それらがすべて「敵への寝返り」や「スパイへの転落」に仕立て上げられたのである。

カーダールの戦前の経歴が洗われ、二つの弱点が発見された。一つは、ファシズム政権の追求から逃れるために、1943 年に共産党の解党が議論された時に、解党を積極的に唱えた張本人だという事実である。今一つは、逮捕歴があり、指紋が採取されているにもかかわらず、重罪が想定された終戦直前の逃亡兵容疑の再逮捕事件で簡単に釈放されたことである。ラーコシは声高に、「スパイである以外に、このようなことは考えられない」と断言し、カーダールの逮捕を指示したのである。

1951 年 4 月 21 日。薔薇が丘の自宅で昼食を終え党本部へ向かうカーダールの車は途中で、保安警察長官ピーテル・ガーボルが乗る車に止められた。ピーテルはカーダールに逮捕を告げて拘束し、同時に逮捕した同じく政治局員のカーライ・ジュラとともに、12 区のヴィラニョシュ通りに保安警察が所有していた秘密の館に監禁された。

カーダール逮捕に至る前に、国内派の古参共産党幹部の逮捕が続いていた。1950 年から 1951 年にかけて、ラーコシの盟友で古参党員として知られるドナート・フェレンツ等が、1944 年の共産党再結成に反対したという理由で逮捕されていたから、カーダールは自らの立場が安泰なものではないことは感じていたはずである。実は、カーダール逮捕前日の 20 日にも、非常に残酷な事件が起きていた。

共産党政治局員で内務大臣を務めていたゾリュド・シャンドールが、ベンツール通りにある自宅の館で、二人の子供、妻と母を猟銃で殺し、自らも自殺した。午前の政治局員会議でラーコシが内務省の仕事ぶりを激しく批判し席を立ったのを受け、ゾリュドは辞表を提出し、その足で家に戻って一家心中を図った。遺書が残されており、ピーテル・ガーボルは現場の電話で遺書の一部をラーコシに伝えた。「こういう状況の中では、もう生きている意味はない」という内容だったと言われる。ピーテル・ガーボルがこの遺書をラーコシに届けた際に、ラーコシはピーテルの動揺を叱責し、この件について箝口令を敷いた。さらに、ラーコシは幹部会でゾリュドを「敵だった」と決めつけたが、この事件にかかわる調査はいっさい行われなかった。

さて、カーダール尋問の指揮をとったのは、四人組の一人のファルカシュ・ミハーイであり、ファルカシュは息子のヴラジミールを保安警察内の尋問チームのリーダーに指名した。保安警察内でファルカシュが尋問の陣頭指揮に立つのはこれが初めてで、息子のヴラジミールが尋問の責任者になったのもこれが最初だった。ヴラジミールはまだ 26 歳にも満たない若者であった。戦前の共産党の歴史も知らない弱輩がカーダールの尋問指揮にあたったことは、カーダールの自尊心を非常に傷つけた。もちろん、カーダールは逮捕の指示

がどこから来ているかは承知していたであろうが、尋問の先頭に立ったファルカシュ・ミハーイ父子はカーダールの逆恨みを買うことになった。後にハンガリーのスターリン主義時代の清算を行う際に、ラーコシ＝ゲルーが自らの責任を逃れるために作った「すべてのフレームアップの首謀者はファルカシュ父子」という筋書きを、カーダールも自らの政治生命の延命のために積極的に利用することになる。

他方、カーダール逮捕に決定的な情報をラーコシに提供し、カーダール逮捕の先頭に立ったピーテル・ガーボルは、自白書を撤回したカーダールを説得して、再び自白書に署名させた。カーダールがライクを自白させたように。二人の間でどのような会話が交わされたのか分からないが、自白書提出以後もカーダールはレストランから配送された食事を与えられる等の待遇を受け続けた。当時の尋問において、「カーダールは爪はがしの拷問を受けた」というのは、動乱以後のカーダールを英雄に仕立てるための作り話で、カーダールだけは特別待遇を受けていた。後になってピーテル・ガーボルは、「死刑を要求したラーコシからカーダールの命を救った恩人」という役割を強調することで、動乱以後のカーダール政権下での生き残りに賭けるのである。

もちろん、カーダールが処刑されなかったのは、ピーテル・ガーボルの助力によるものではなく、ソ連共産党政治局の賛同を得ることができなかったからと考えられる。実際、ハンガリーを訪問した政治局員のヴォロシロフが、「カーダールは本当に敵なのか」とピーテルに尋ねたという。ソ連共産党が逮捕に疑念をもっている人物を、ラーコシの一存で処刑することはできなかったのだ。

ナジ・イムレ処刑50年

2008年６月16日、ナジ・イムレ処刑50年にあたり、ハンガリーでは各種の追悼集会が開かれた。ハンガリー動乱とナジ・イムレの運命について

ここでは繰り返さない。1956年のハンガリー動乱時に首相の任にあったナジ・イムレと行動を共にしたナジ側近たちは、ソ連が樹立したカーダール政権の人民法廷で裁かれ、1958年６月15日に「反革命」の汚名を着せられて死刑判決を受け、翌16日に絞首刑に処せられた。こうしてナジ・イムレはハンガリー動乱を象徴する歴史的人物になった。

ナジ・イムレ復権

1989年6月16日、ハンガリーはナジ・イムレと側近たちの復権を行い、再埋葬式を挙行した。当時、日本大使館に勤務していた筆者は外交団の一員としてこの埋葬式に参加し、翌7月６日に日本国大使とともに社会主義労働者党本部に新党首ニェルシュ・レジューを訪問した。その折に、当日朝のカーダール訃報が口頭で伝えられた。カーダールがナジ復権を知っていたかどうかは分からないし、それを知り得たとしてもその意味を理解できたかは分からないが、死の直前までライク・ラースローとナジ・イムレの亡霊に悩まされていたと言われる。

ナジ・イムレ復権とカーダール死去は、ハンガリーが30年余にわたったカーダール時代に別れを告げ、新たな時代を迎える象徴的な出来事であった。ハンガリー動乱は「反革命」でなく、「革命」であったと再評価された。反革命の汚名を着せられたナジ・イムレは、今度は56年ハンガリー革命の英雄となった。そのナジ・イムレの処刑50年が今年にあたる。

ナジ・イムレが革命の英雄であれば、今度は逆にカーダールは反革命の象徴になるのだろうか。事は単純ではない。

今、ハンガリー人は皆、「56年革命」と表現する。少し前までは「56年反革命」だった。しかし、人々の心情は複雑である。動乱の評価と政治家個人の評価は別なのだ。社会主義労働者党本部で催されたカーダールの葬儀には、万を数える人々が参集し、党本部周辺はドナウ河沿いの沿岸道路まで、参列する人々の長蛇の列が続いた。ハンガリー国民はその光景に、改めてカーダール人気を感じ取った。

ナジ首相に正統性を付与すれば、カーダール政権の正統性が消滅する。しかし、30年にわたるカーダールの統治に正統性がなかったとは単純には言えない。まさに、これこそ歴史と現実における正義と正統性の典型的な問題なのである。

ショーヨム大統領の問題提起

ジュルチャーニィ首相はナジ・イムレ処刑50年を追悼する特別国会へ、大統領、野党党首、外交団を招いた。これにたいして、FIDESZとKDNPの党首は招聘を受けず、大統領もまた参加の意思を表明しなかった。FIDESZとKDNPは不参加の理由を明示しなかったが、ショーヨム大統領は他の追悼集会において持論を展開し、暗に首相主催の追悼国会を批判したのである。各メディアはこれを取り上げ、多くは大統領の行動を批判したが、ショーヨム大統領の持論に耳を傾ける必要があるだろう。

ジュルチャーニィ首相を初めとする社会党の中には、56年動乱を単純に「革命」と規定できないと感じている政治家がそれなりの数で存在する。56年動乱で死刑判決を受けたグンツ元大統領もまた、「人の数ほど多様な56年が存在する」と語っている。ジュルチャーニィ首相演説でも、この辺りは不明瞭で、10月23日の動乱勃発時には革命だったが、次第に不明瞭になっていったという趣旨のことを述べている。

ショーヨム大統領はまさにこの動乱評価の曖昧な両義的解釈を批判している。「56年革命」の評価は両義的なものではなく、一義的なものでなければならない。いったん「革命」と規定したからにはその評価は一義的でなければならず、ナジとカーダールの双方を評価するような両義的評価とは一線を画さなければならないというのが、大統領の持論である。

ショーヨム大統領によれば、1989年6月16日の再埋葬式でナジ再評価は決まっており、体制転換の重要なモーメントであったという。同年10月23日に当時の社会党の暫定大統領スーロシュが行った共和国宣言は、形を変えただけの社会党がヌエ的に行った行事であり、体制転換の本質的事件を構成しないとまで断言している。

56年動乱を革命とし規定しながら、カーダール主義の継続性（正統性）を暗に認めるのは誤っており、56年評価は明瞭かつ一義的でなければならないというのである。

動乱評価の両義性

ショーヨム大統領は革命の両義的評価を排除する事例として、昨年に提起されたホルン元社会党党首にたいする叙勲拒否の事例を指摘している。動乱抑圧側に立ち、動乱後の政権を擁護する政治家は、体制転換後に樹立された共和国の国家叙勲に値しないという。この問題についても本誌で論じたのでここでは再述しないが、明らかにホルン叙勲はジュルチャーニィ首相が党内における地位を固めるために、重鎮のホルンの誕生日に合わせて叙勲申請したものだった。この胡散臭い叙勲申請に、ショーヨム大統領が署名しなかったのは一つの見識である。そして、それはまた、社会党の56年動乱評価における両義性を再び暴露することにもなった。

ジュルチャーニィ自身、私生活において、カーダール時代の継続性を、身を以て体験している。妻の祖父でハンガリー共産党の政治局員だったアプロー・アンタルがカーダール政権時代に取得した邸宅が、ジュルチャーニィの現在の私邸である。アプロー・アンタルは40年近い党生活のほとんどを、最高指導部の政治局員として過ごしており、ライク処刑時においても、またライク復権時にも、さらにはナジ処刑時においても政治局員だった経歴をもっている。アプローの政治歴はまさに両義的という評価を通り越して、歴史の激動の中で、常に権力の中枢に身を置いていた不思議な政治家である。どの権力者にとっても都合の良い存在だったのだろうか。見識のある政治家は、このような過去をもつ政治家の遺産を私邸として使わないだろう。

ショーヨム大統領がジュルチャーニィ首相の招聘をうけなかった背景には、こうした政治家個人としてのけじめの問題もあろう。襟を正して、カーダール時代との決別を告げるなら、アプロー・アンタルの邸宅を出るべきだという考えがあっても当然のことだ。もっとも、こういう潔癖さは日本人には理解できても、ハンガリー人の多くには理解されない。それがまたハンガリーの問題でもある。

個人的体験と体制存立の論理

一つの歴史事件の評価と個人の体験を切り離すことは、同時代人にとって非常に難しい。56年当時の年齢、職場、居住地、生活環境によって、個人として体験した56年は、グンツ大統領が言うように多種多様だろう。後の政治的評価によって、当時の個人の政治行動を断罪するのは硬直した見方である。

他方、政治体制として、56年以後の体制をどのように評価するかは、個人体験の多様性とは異なり、明瞭な歴史的評価が下される。どのように考えようが、56年動乱で誕生したカーダール政権には、少なくとも政権誕生の経緯には、正統性がない。ソ連が構築した傀儡政権であることは明々白々である。

したがって、個人が体験した56年動乱およびその後の生活の評価と、56年動乱によって樹立された政権（体制）の評価とは区別して考えなければならない。56年の体験が多様であるから、56年動乱後の体制評価も多様であって良いということにはならない。逆に、56年後の政権評価

は一義的だから、56年動乱時の個人の役割が一義的に確定できるとは言えない。

体制の評価が決まれば、国家としてのけじめがある。それは個人の多様な体験を否定するものでないが、国家としてそれぞれの個人を顕彰できるかどうかは、国家の存立価値にかかわっている。したがって、ホルン社会党元党首の場合、個人として動乱抑圧側に立たざるを得なかったという個人的事情は了解されても、旧体制を否定して成立した共和国国家が、旧体制を肯定する人物を顕彰できないという論理は筋が通っている。国家として、56年以後の体制の両義性を認めることはできない。

この点は「靖国参拝」をめぐる議論と似たところがある。個人として戦争に参加した人々には、多様な生活と体験があったことは否定しようのない事実であり、個人としての生き様が後年の体制評価によって断罪されてはたまらないと感じる人は多いだろう。他方、日本は戦後、戦前の天皇制軍国主義体制の否定の上に立って議会制民主主義国家として出発したことも明らかである。とすれば、個人として「靖国神社」へ参拝することは何ら非難されることではないが、政治家が意図的に参拝し、軍国主義の犠牲者を祭り上げることに積極的な意思を表示すれば、戦前の体制否定という一義性が否定されることになる。

この事例のように、20世紀には膨大な人命を犠牲にしてきた歴史事件が多発し、正統性が疑われる実に多種多様な政治支配が存在してきたために、個人と体制という矛盾した関係から完全に解き放たれることはできない。

体制理解と個人の役割

2006年から2007年にかけて、本誌において「ハンガリー動乱50年」の連載を行い、動乱からナジ処刑にいたるプロセスを再考した。現在、本誌では56年動乱に至るプロセスを連載しているが、それは「56年動乱」を評価する場合、動乱の10日余の分析を行っても評価することはできず、動乱に至る歴史的過程や動乱以後の政治過程を綿密に考察することによって初めて、その歴史的意義を明らかにできるからである。

そのことは56年動乱という事件に限らず、ナジやカーダールの個人としての歴史評価においても必要なことである。ナジが英雄視されるのは、あくまで「56年動乱の殉教者代表」ということであって、ナジ個人が動乱前から対ラーコシ独裁に果敢に闘い、動乱発生時にはハンガリーが進むべき道を明確に示したからではない。実際には、この双方の面において、必ずしも高く評価される政治家ではなかった。しかし、歴史の歯車によって、ナジは56年の殉教者になり、「56年革命の象徴」になったのである。

他方、カーダールはナジと行動を共にしながら、拉致されたとはいえ、ソ連の傀儡政権樹立の協力者としてブダペストに戻ってきた。この意味でナジとは対照的である。

しかし、ハンガリーにカーダールが存在したことは、ある意味で幸運なことでもあった。ソ連の保守派はカーダールではなく、ソ連亡命歴をもつ政治家を頭に据えることを画策していたからである。ソ連占領下という現実の中で、ハンガリー民族が取り得る選択肢は限られていた。そのカーダールに権力出生の正統性はないが、ソ連から距離をとる「柔らかい独裁」体制の構築に励むことによって、ソ連圏内部での相対的な自由と豊かさを確保した。統治の始まりに正統性はないが、統治が持続することで「事実としての正統性」が生じてくる。まさに、カーダール体制はそのようなものであった。

ただ、歴史の評価は常に変わる運命にある。ソ連圏でより増しな体制を構築したカーダールは評価されるが、究極のところ、ソ連型の社会主義の枠を破ることができなかった。そして、長期の「柔らかい独裁」の弊害は、体制転換以後の市場経済化プロセスで明らかになっている。鎖国の「ぬるま湯」的体制に慣れ親しんだ国民が、市場経済の厳しさを正面から受け止めることは難しい。現在もなお、ハンガリー社会にはカーダール体制の慣性が支配している。

ハンガリー動乱50年と経済学者

動乱と知識人

2006年秋、ハンガリーは動乱（ハンガリー革命） 50年周年を迎え、さまざまな行事が計画されている。動乱をくぐり抜けた人々の多くが、国外に亡命した者も国内に残った者も、すでに他界している。現閣僚もほとんどが動乱以後の世代で、動乱の記憶はない。50年の歳月は動乱を過去の歴史に埋め込むのに十分な時間だ。

それぞれの当事者が人生のどの時期にこの事件に遭遇したかで、その後の人生が決まった。国外に亡命した多くは20歳前後の若者だった。これより5～6歳も若いと、両親が亡命しない限り、自らの意思で国外脱出を図ることは難しかったし、20代後半の若者には簡単に亡命できない家族事情もあっただろう。30代の働き盛りで、職場や地域で動乱の指導的役割を果たした者には、亡命か国内残留か難しい決断が迫られた。実際、国内に残る決断をした指導者の多くは絞首台に送られた。

これだけの歴史時間を経ても、いまだ動乱の記憶の中に生きている人々もいる。INTELの社長・会長を務めたグローヴは、頑なにハンガリー訪問を拒み続けている。やはり動乱で国を離れ、1994年にノーベル化学賞を受賞したオラーはまだ健在で、定期にハンガリーを訪問している。投資家のソロスは戦後直後にハンガリーを離れたので動乱には関わっていないが、体制転換直後から精力的にハンガリーとの関係修復に努めている。

動乱で亡命し世界的な成功を収めた人々がいる反面、国内に残り、動乱鎮圧（革命敗北）後の苦しい時期を過ごしてきた知識人がいる。ある者は不遇のうちに無念の死を遂げ、ある者は動乱以後の体制改革に希望を見つけ、さらにある者は政治から離れて学問研究に邁進して、その後の人生を歩んだ。歴史的事件の裏には、さまざまな人間模様がある。

ピーテル・ジョルジュとタルドシュ・マルトン

6月初め、当地の新聞でタルドシュ・マルトンの訃報を知った。カーダール体制における改革派知識人を代表する人物の1人だった。1928年生まれのタルドシュはユダヤ人の家庭に生まれ、ブダペストのドイツ帝国学校に通った。多くのユダヤ人青年と同様に、ナチスからの解放後、ドイツ軍と戦った共産党に加わった。全国学生連合書記の役割を担ったタルドシュは、政治的エリート養成の一環として、レニングラード大学へ留学する機会を与えられた（1948-1952年）。彼にとって、それが転機になった。

タルドシュのレニングラード大学留学は、社会主義への確信を強めるどころか、ソ連型社会主義の失敗を確信する４年となった。ハンガリーより生活状態が悪いソ連の現状に失望したのだ。この留学経験がその後の彼の人生を決めたと語ってくれたことがある。

ソ連から戻ったタルドシュは国家計画庁にエコノミストとして勤務した。この頃に、ハンガリーの経済改革のもっとも重要な人物であるピーテル・ジョルジュと知り合った。ピーテル・ジョルジュは開明的な共産主義者で、戦前はラーコーシとともに長期間獄中にあったが、戦後は中央統計局の創設に携わり、タルドシュと出会う1950年代初めには中央統計局長官の地位にあった。それが縁で、ピーテルの娘を妻に娶ることになった（1955年）。

当時、ピーテル・ジョルジュは計画経済の行き詰まりを感じ、市場経済システムの導入が不可欠であると考えた。そこで、彼は有能な若い研究者を求め、人材の発掘と養成に努めていた。その若者の1人がタルドシュであり、もう1人がコルナイ・ヤーノシュであった。

さらに、共産党の若いブダペスト地区幹部で経済担当に成り立てのニェルシュ・レジューもまた、ピーテルに教えを請う1人だった。後に、

ニェルシュは党中央の経済改革の責任者として、1968年の経済改革の実現を図り、一躍その名を知られることになった。

ニェルシュ・レジュー

1956年の動乱に際して、タルドシュは計画庁の中に「革命委員会」を組織した。このため、動乱鎮圧後に計画庁を追放され、景気循環・市場経済研究所へ左遷された。以後、タルドシュは国内の反体制、改革派経済学者としての道を歩むことになった。

そのタルドシュが再び脚光を浴びるのは1980年代である。経済改革への抵抗が強まった1970年代半ばにニェルシュは党中央の役職を解かれ、経済研究所所長に移動した。ニェルシュはタルドシュを経済研究所に呼び寄せ、この二人が1980年代の第二次経済改革の原動力になり、1989年の体制転換にいたる変革の道を開いた。

ニェルシュはカーダール亡き後、最後のハンガリー共産党（社会主義労働者党）の党首となり、共産党の幕引き役を担った。1989年初夏に関大使とともに共産党本部にニェルシュを訪ねた時に、彼の口からカーダールの死去を聞かされた。1980年代半ばに、外務省の招聘プログラムでニェルシュが訪日した折、２日ほど東京の町を案内したり、大学でセミナーを開いたりしたことがある。党の幹部でありながら思慮深く、物静かな学究的タイプのニェルシュは、日本の学者にも評判が良かった。

1980年代のタルドシュはニェルシュとともに、ハンガリー社会主義に持株会社のような資本主義的な要素を入れていく改革案を提起した。これが社会主義の改革に限界を感じていたコルナイとの距離を広げ、さらに1990年代初期の政策提言でも見解の相違が増幅され、二人の関係が気まずいものになった。

筆者が大使館専門調査員で当地に勤務していた1989年に、タルドシュが創設した金融研究所に定期的なブリーフィングを要請した。タルドシュ本人が行う時もあったが、たいていは金融研究所や経済研究所の研究員が、ブリーフィングしてくれた。その中には前経済大臣のチッラグ・イシュトヴァーンもいた。

体制転換が始まった1990年初頭には、やはり動乱時にアメリカに亡命し、インディアナ大学教授になったポール・マーラーとともに、タルドシュは新政府への経済政策提言策定のための国際的組織（ブルーリボン委員会）を立ち上げ、マーラーと共同議長の役割を果たした。アメリカからソロスも頻繁にこの会合に顔を出していた。野村総合研究所がこの委員会のスポンサーになり、日本でも会合を開いた。マーラー、タルドシュと私の三人で、中日新聞で鼎談も行った。何度も個人的な話をする機会があったが、タルドシュからライフヒストリーを語ってもらう機会を失った。コルナイとの長時間のインタヴューやニェルシュのインタヴューの記録を取ったので、次はタルドシュと考え、彼に電話する毎に、そのことを話し合っていたが、いつの間にか緊急性を感じなくなり、その機会を永久に失ってしまった。

コルナイ・ヤーノシュ

同じくピーテル・ジョルジュを師とするコルナイは、高校を卒業後、共産党中央機関紙編集局に入った。1954年の編集局における記者たちの反乱（ラーコーシ一派にたいする）によって、編集局を追放され、設立されたばかりの経済研究所に新たな職場を見つけることになった。共産党の経済記者時代に蓄積した経験をもとに、社会主義システムの問題を解明した著作（博士候補論文）「経済管理における過度集権化」が動乱直前の1956年9月に審査を受け、研究者間でセンセーションを巻き起こした。動乱後の混乱に乗じてこの論文が出版され、さらにその英語版もオックスフォード大学出版局から発刊され（1958年）、社会主義研究分野でコルナイの名前が国際的に知られることになった。

動乱にはかつての編集局の上司や仲間が加わったが、コルナイは非合法的な活動から一線を画していた。編集局時代の直接の上司が絞首刑に処せられたギメシュ・ミクローシュである。

動乱から暫く経て、コルナイの博士候補論文が反革命の経済思想として批判の対象になった。これで経済研究所を離れることを余儀なくされ、加えて動乱時におけるギメシュとの関係を尋問される毎日となった。他方で、コルナイはその能力を見込まれ、新政府の経済政策立案への参加を依頼されたが、そのすべてを断り、学問研究の道に埋没した。政府・党との協力を一切排して自らの道を貫く頑固さは、1980年代からの改革促進過程でも変わらず、その姿勢が同僚の改革派経済学者から批判を受けた。

1960年年代初めに、コルナイが数学者のリプタークとともに仕上げた二本の論文が、国際計量経済学会の機関雑誌に採用され、数理経済学の世界でも一躍名の知られる存在になった。それに続き、正統派経済学の中核理論である一般均衡論を批判する大胆な著作『反均衡』を出版し（1971年）、理論経済学の世界でも広く知られる存在になった。以後、コルナイは、ほぼ毎年、アメリカあるいはイギリスの大学に招聘される生活を続けることになったが、けっして亡命の道を選ばなかった。とくに1970年代初めのケンブリッジでは、ジョーン・ロビンソンに代表される伝統的な経済学者とフランク・ハーンに代表される数理経済学者との軋轢が顕著になり、これを仲介できる人物としてコルナイに白羽の矢が立てられた。しかし、コルナイはこの要請も即座に断った。これらの招聘は皆、移住を前提するものだったからである。

1980年に発刊された『不足の経済学』は、社会主義経済における不足現象の再生産を、システムに固有な問題として解明した著作である。この著作が発したメッセージ、つまり「社会主義経済は不足を解決できない」という含意は、1980年代のソ連・東欧や中国における経済改革の機運を理論的に支える役割を果たした。コルナイのこの著作は、ソ連・東欧のほとんどの諸国で非合法に翻訳され、改革派知識人の間で回し読みされた。ロシアの新興実業家の群像を描いたDavid E. Hoffmanの *The Oligarchs* (Public Affairs, New York, 2002)の中に、コルナイことも記されている。当時、ロシアの改革派知識人の間では「コルナイを読んだか」と聞くのが、挨拶代わりになっていたという。この著作がソ連・東欧や中国の改革派経済学者に及ぼした影響は計り知れない。伝統的なスタイルと違う社会主義分析手法は新しい理論パラダイムを示すものとして、この分野の研究者の誰もが注目した。日本でも1980年代のこの分野の専門研究で、コルナイを引用しない人はいなかった。

この理論的著作で、コルナイは一つの区切りを付けたようだ。この時期には、スタンフォード大学とUCLAからの教授招聘の話が進んでいたが、最終的に1986年にハーヴァード大学教授の招聘を受け入れた。ただし、ハンガリーとアメリカを半年ずつ往来するという条件に拘り、教授職を辞するまで、この生き方を貫いた。

ブローディとベレンド

コルナイ世代のハンガリー経済学者・経済史家で、国際学界で名を知られているハンガリー人は数理経済学のブローディ・アンドラーシュと経済史家のベレンド・T・イヴァン。両者とも日本でもよく知られた学者である。とくに、ベレンドは日本を何度も訪問したことがあり、彼の薫陶を受けた日本の経済史家も多い。

ベレンドは体制転換時期に科学アカデミー総裁の地位にあり、カーダール引退後の共産党で中央委員に任命された。1988年から1990年にかけて、ハンガリー共産党内部の亀裂が拡大し、中央委員会で激しい論議が交わされた。この時期、筆者はちょうど日本大使館勤務にあり、中央委員会が終わる度にベレンドを訪ね、委員会の議論の内容を教えてもらった。ベレンドは共産党が設置した「ハンガリー動乱」再評価委員会の座長を務め、「ハンガリー動乱は人民蜂起」とする報告を準備した（1989年12月）。体制転換後、アメリカに移住し、現在はUCLAのヨーロッパ・ユーラシア研究所（旧ソ連・東欧研究所）所長を務めている。

ベレンドは歴史分野なのでコルナイとの関係は希薄だが、コルナイとブローディの関係はタ

ルドシュと似通ったところがある。投入産出分析とその手法を応用した経済理論で国際的に知られるブローディは、コルナイより早く数理経済学の世界に入り、コルナイが数理経済学の道を歩み始める際に、共同研究者となる数学者リプタークを紹介した仲である。ところが、コルナイが1960年代後半からほとんど毎年のように長期に国外の大学・研究所へ招聘されるのにたいし、ブローディには投入産出分析学会以外から声がかからなかった。また、ブローディはコルナイの『不足の経済学』刊行においても、校閲者として積極的な評価を下して著書の発刊に寄与したが、コルナイが国際的な名声を得るのにたいし、ブローディの出番は少なかった。嫉妬に近い羨望があったことは間違いない。余談になるが、ブローディの息子は、ハンガリーでよく知られたポップス歌手・作曲家である。

タルドシュなどの改革派経済学者が政治的な圧力を感じながら、国内での改革に力を注いでいるのにたいし、コルナイは国内改革に一切かからわらず、国外で理論活動を展開していたことに、改革派の理論家は快く思っていない。この種の軋轢、羨望や嫉妬は学界では良く見られる現象であり、一般社会でも普遍的な現象だが、ハンガリーにおける改革経済学者とコルナイの生き方の違いは、1956年の動乱が契機になっている。このあたりの事情は、昨年発刊されたコルナイの自伝『思索する力を得て』（邦訳『コルナイ・ヤーノシュ自伝』日本評論社、2006年）に詳しい。

不可解な自殺や事故

最近、フサール・ティボールの『カーダール』（*Kádár —A hatalomévei 1956-1989*）が発刊された。ソ連共産党とハンガリー共産党（社会主義労働者）との関係を記した著作だ。現在、ソ連共産党政治局の議事録が 1954 年から 1974 年まで公開されている。その資料にもとづいて記されたカーダール時代録である。

この著作ではカーダール政権が危機に直面した時期のことが描かれている。ハンガリーでは 1963-4 年頃から経済改革が開始され、多くの経済学者を巻き込んだ委員会が立ち上げられた。これを統括したのが、ニェルシュ・レジューである。最終的に、1968 年 1 月 1 日をもって、指令経済体制を廃止し、市場を利用した制御された経済体制へ移行することが宣言された。もちろん、宣言されたことと、実行されたことは別物であるが、ちょうどこの年の夏にソ連軍（公式にはワルシャワ条約機構軍）が、チェコスロバキアの政治改革（プラハの春）に介入すべく、プラハに戦車を送り込んだ。

事ここにいたって、ソ連共産党政治局は東欧体制の緩みが社会主義の崩壊を導くという危機感を抱き、ハンガリーの改革路線に介入して、カーダールを交代させるシナリオが浮上したようだ。以前にニェルシュが語ったところによれば、カーダールはチェコスロバキアとソ連との仲介役として、最後の瞬間までハンガリーとソ連国境付近で列車に待機していたソ連共産党幹部と交渉にあたっていた。しかし、その仲介は奏功しなかったばかりか、カーダール自身の進退にかかわる事件に拡大していった。ハンガリーの経済改革が中途半端なものに終わった原因の一つに、このような歴史的事情がある。

フサールはソ連の圧力が強まった1968年から1973年にかけて、改革派の著名な人物や政治家、諜報部員の不可解な自殺や事故が続いていることを一つのテーマとして取り上げている。その最初の事例が、1969年1月4日のピーテル・ジョルジュの自殺である。ピーテルはソ連軍のプラハ侵攻を批判した廉やナポレオンの金塊処分というフレームアップで拘束され、収容された病院で「自殺」した。「自殺」現場はタルドシュとその妻（ピーテルの娘）が確認しているが、改革派への無言の脅迫行為として行われた殺人ではないかという疑いが晴れない。

このことを含めて、タルドシュから直に聞きたかったが、その機会を永久に失ってしまった。